

松江市文化財調査報告書 第74集



文化財愛護
シンボルマーク

柴Ⅲ遺跡発掘調査概要報告書

1997年3月

松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

例 言

1. 本書は、財団法人 松江市教育文化振興事業団が平成8年度に実施した（仮称）西川津宅地開発事業予定地内の柴皿遺跡の埋蔵文化財発掘調査報告書である。
2. 本発掘調査は、タケウチ宅建から松江市教育委員会が依頼を受け、財団法人 松江市教育文化振興事業団が実施したものである。
3. 発掘調査事業の組織は以下のとおりである。

依頼者	タケウチ宅建		
主体者	松江市教育委員会		
事務局	教 育 長	諏訪 秀富（平成8年4月まで）	
		原 敏（平成8年5月から）	
	教 育 次 長	石田 博	
	生涯学習課長	松本 修司	
	文化財室長	岡崎雄二郎	
	文化財係長	中尾 秀信	
実施者	財団法人 松江市教育文化振興事業団	埋蔵文化財課	
	理 事 長	大塚 雄史	
	事 務 局 長	板垣 信治（埋蔵文化財課長を兼務）	
	埋蔵文化財課		
	調 査 係 長	瀬古 諒子	
調査者	調 査 担 当 者	昌子 寛光	
	調 査 補 助 員	平木 敏枝	

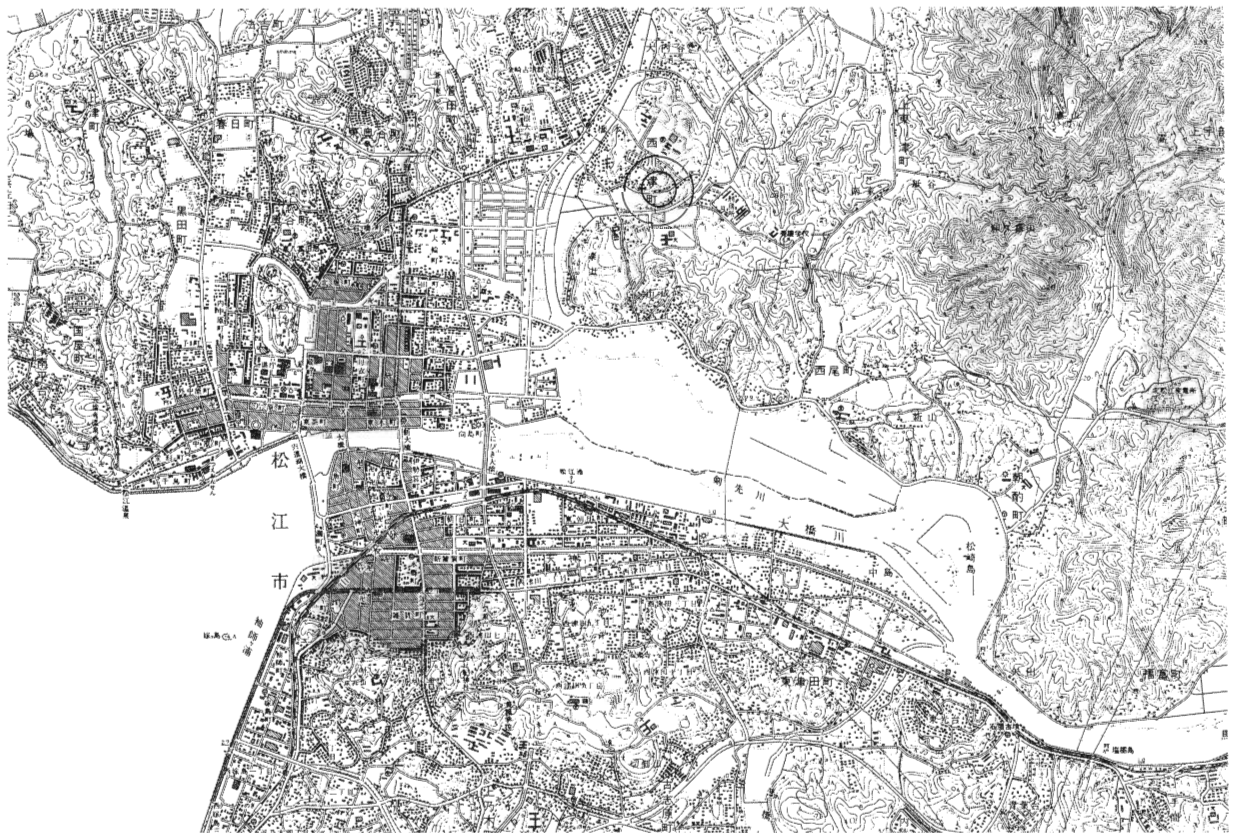
4. 調査の実施については、次の方々の指導と協力を得た。記して感謝の意を表する次第である（敬称略）。

足立克己（島根県埋蔵文化財調査センター）、丹羽野裕（同）、熱田貴保（同）、林健亮（同）、中村唯史（島根大学大学院生）、荻野哲二（松江市教育委員会）、江川幸子（財団法人松江市教育文化振興事業団）、曾田辰雄（同）、石川崇（同）、松下剛（同）、（有）豊和不動産、（株）豊洋建設、（株）エイトコンサルタント

5. 出土遺物は、すべて松江市教育委員会で保管している。
6. 本書の執筆・編集は、江川、石川、曾田の協力を得て、昌子がおこなった。



第1図 島根県地図



第2図 柴Ⅲ遺跡位置図

目 次

I. 調査に至る経緯	4
II. 周辺の地理的、歴史的環境	5
III. 調査の概要	9
(1) 調 査 南 区	
(2) 調 査 東 区	
IV. 小 結	37
(1) 出土遺物について	
(2) 検 出 遺 構	

I. 調査に至る経緯

タケウチ宅建は、松江市街地の北東、西川津町字柴に所在する低丘陵一帯を平成7年度から「(仮称)西川津宅地開発事業」として造成することを計画したので、松江市教育委員会では、周辺地域での遺跡の密集した分布状況や開発予定区域現況図内の等高線が緩やかな状況から、平成6年11月に開発予定区域内の分布調査を実施した。その結果、丘陵の東向き緩斜面は既に畑及び宅地として開墾・削平されていたが、南向き緩斜面は自然地形のままと思われ、試掘調査の必要があると判断した。よって、この南方に延びた舌状の緩斜面に10×2 mを基本とするトレンチを南北に2本設定して(南側に設定したトレンチを「T-1」、北側に設定したトレンチを「T-2」とした)、平成6年11月7日から11月15日までの7日間を費やして試掘調査を実施した。

その結果、T-1の南側で地山が20 cm程掘り込まれると共に地山の上に黒褐色土が堆積していた。さらにこの地山面から弥生時代後期の壺形土器の口縁部片が出土したことから、この遺構は弥生時代後期の竪穴式住居跡の可能性が高いと思われた。一方、T-2では表土の下で認められた褐色土面で径10~20 cmを計るピットを数穴検出すると共に僅かな土器片が出土したことから何からの遺跡があると思われた。

以上のことから、今回新たに発見されたこの遺跡を「柴Ⅲ遺跡」と命名した(第2図)。

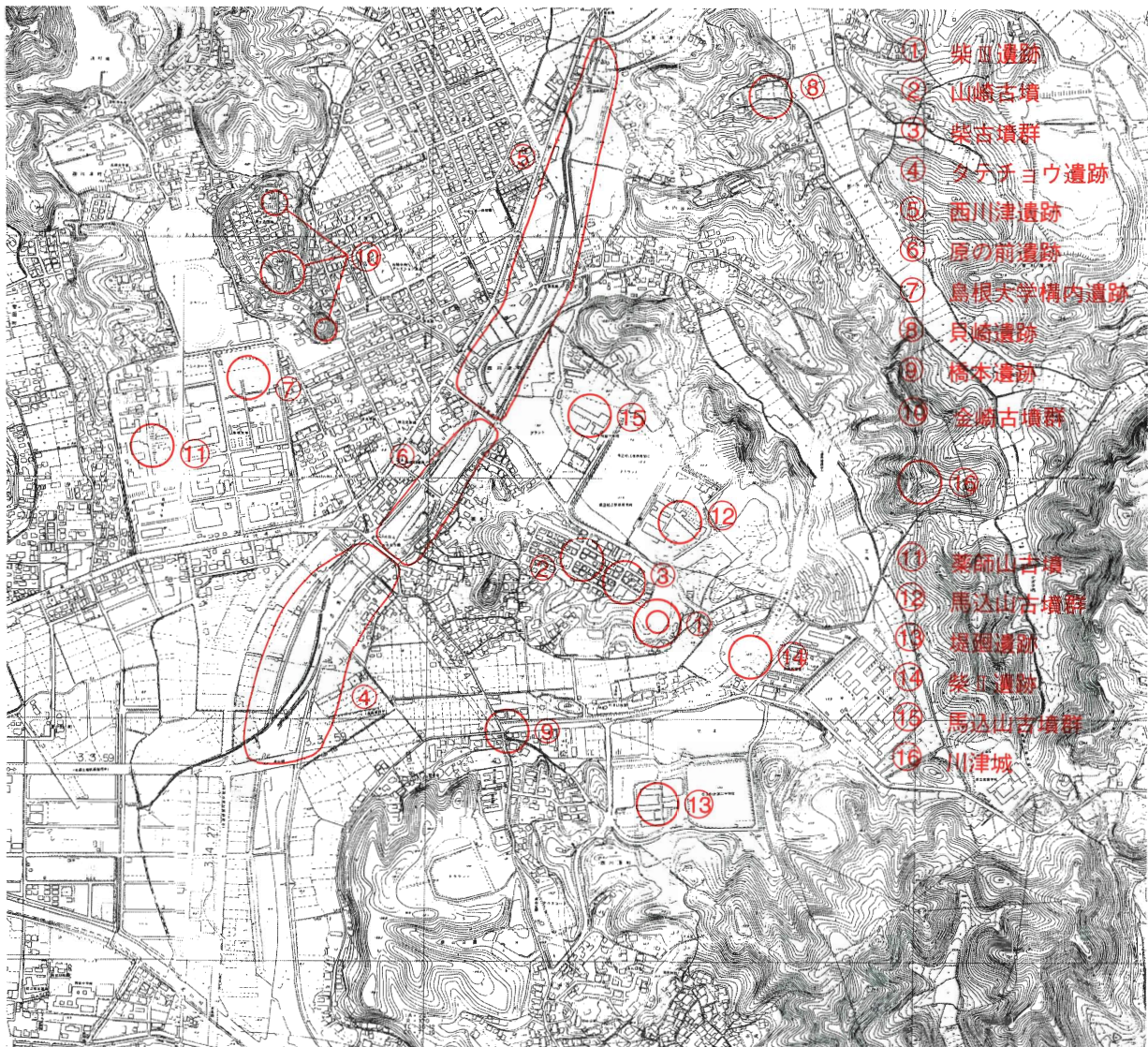
その後の松江市教育委員会と開発事業者との協議の結果、この遺跡の取り扱いについては現状保存や開発事業の計画変更等が困難であることから、平成8年度において発掘調査を実施することになった。

このことより、現地調査を平成8年5月20日より平成9年2月18日までの9ヶ月を要して実施した。

Ⅱ. 周辺の地理的、歴史的環境

柴Ⅲ遺跡(①)は松江市西川津町字柴3080-1番地に所在し、国道431号線と国道431号線バイパスとの間の低丘陵の南向き緩斜面に位置する。本遺跡が存在する同一丘陵の尾根上には、今は開発工事で消滅してしまった山崎古墳(②)と柴古墳群(③)が所在していた。

本丘陵を巨視的に見ると、南北750m、東西1000mの三角形の独立丘陵から南側に派生する舌状台地様の低丘陵と言える。一級河川の“朝酌川”がこの三角形の独立丘陵の北から西側を通り南へと流れ、大橋川に注いでいる。本遺跡が位置する舌状台地様の低丘陵の直ぐ南には幅65m程の谷が西から東へ延びており、朝酌川が形成する広大な沖積平野へと続いている。このような地理的環境を持つ本遺跡周辺は、丘陵と沖積平野の境目付近を中心として、古くから生活が営まれてきたところであ



第3図 周辺の遺跡位置図

る（第3図）。

旧石器時代の尖頭器や細石刃核と思われる石器片が、朝酌川下流域に所在するタテチョウ遺跡（④）や西川津遺跡（⑤）から出土しており、周辺に遺跡が存在していたことを窺わせる^{(1),(2)}。

縄文時代は朝酌川下流域の低湿地帯に所在するタテチョウ遺跡・西川津遺跡の他に、原の前遺跡（⑥）・鳥根大学構内遺跡（⑦）などが知られている。タテチョウ遺跡や西川津遺跡、原の前遺跡からは早期末の繊維土器を初めとして、前期から晩期の土器が石器と共に大量に出土しており⁽³⁾、鳥根大学構内遺跡からは早期から前期の土器・石器と共に前期の丸木舟が出土している⁽⁴⁾。

弥生時代は、タテチョウ遺跡・西川津遺跡・原の前遺跡をはじめ、柴皿遺跡が所在する三角形の独立丘陵の北側裾に所在する貝崎遺跡（⑧）や南側谷に所在する橋本遺跡（⑨）などが知られている。タテチョウ遺跡・西川津遺跡・原の前遺跡からは全時期にわたる遺物や遺構が検出されており、特に出土した局部摩製石鎌や木製農具の遺物の存在や検出された中期の掘立柱建物跡の遺構の存在などから、かなり早い時期より水田耕作の始まっていたことが想定されている。また貝崎遺跡・橋本遺跡からも少量ながら弥生式土器が出土しており、集落跡の存在が想定されている。

古墳時代の遺跡としては、古墳が朝酌川の形成する平野や谷を見下ろすような台地、低丘陵に集中的に造られると共に集落跡も台地や低丘陵で知られている。

例えば古墳としては、金崎古墳群（⑩）・薬師山古墳（⑪）・山崎古墳（⑫）・柴古墳群（⑬）・馬込山古墳群（⑭）などがある。

これらの中で、金崎古墳群は前方後方墳2基・方墳9基からなる中期の古墳群である。1号墳からは副葬品として本地域周辺で最も古いと考えられている須恵器、鉄製品、青銅品、玉類が出土し、また3・5号墳からは墳丘部や墳裾部から円筒埴輪が出土している。金崎古墳群の中でも1号墳は規模、主体部構造、副葬品の内容などから見て、5世紀末～6世紀初頭の本地域周辺一帯の首長墓であったと思われる⁽⁵⁾。

薬師山古墳は、主体部が箱式石棺様で、須恵器、土師器、鉄製品、沓製鏡などが出土した中期古墳で、本墳から出土した須恵器も金崎1号墳と同時期のものと考えられている⁽⁶⁾。

山崎古墳は一辺約19 m、高さ約2 m を計り、割竹形木棺直葬の主体部を持つ5世紀後半頃の方墳である。前期古墳に見られる主体部から墳裾にかけて排水溝の施設を持っていたことと副葬品が鉄製品（鉄剣・鉄刀・鉄鎌・鉞）のみであったことが注目される点である⁽⁷⁾。

柴古墳群は円墳2基・方墳1基からなる中期古墳群で、1号墳の旧表土中には古式土師器の細片が散在しており、また2号墳の墳頂部には故意に破碎された須恵器甕片が散在していた。2号墳から出土した須恵器甕は畿内地方や九州地方とも異なる特徴を持つ初期須恵器であり、また須恵器細片を主体部直上に散布する特異な墳墓祭祀の在り方など注目される点が多い⁽⁸⁾。

集落跡としては、堤廻遺跡（⑮）では竪穴式住居跡が21棟（前期3、中期9、後期前半8、不明1）、掘立柱建物跡2棟が検出された。本遺跡では多くの竪穴式住居跡や掘立柱建物跡が短期間に出現し、

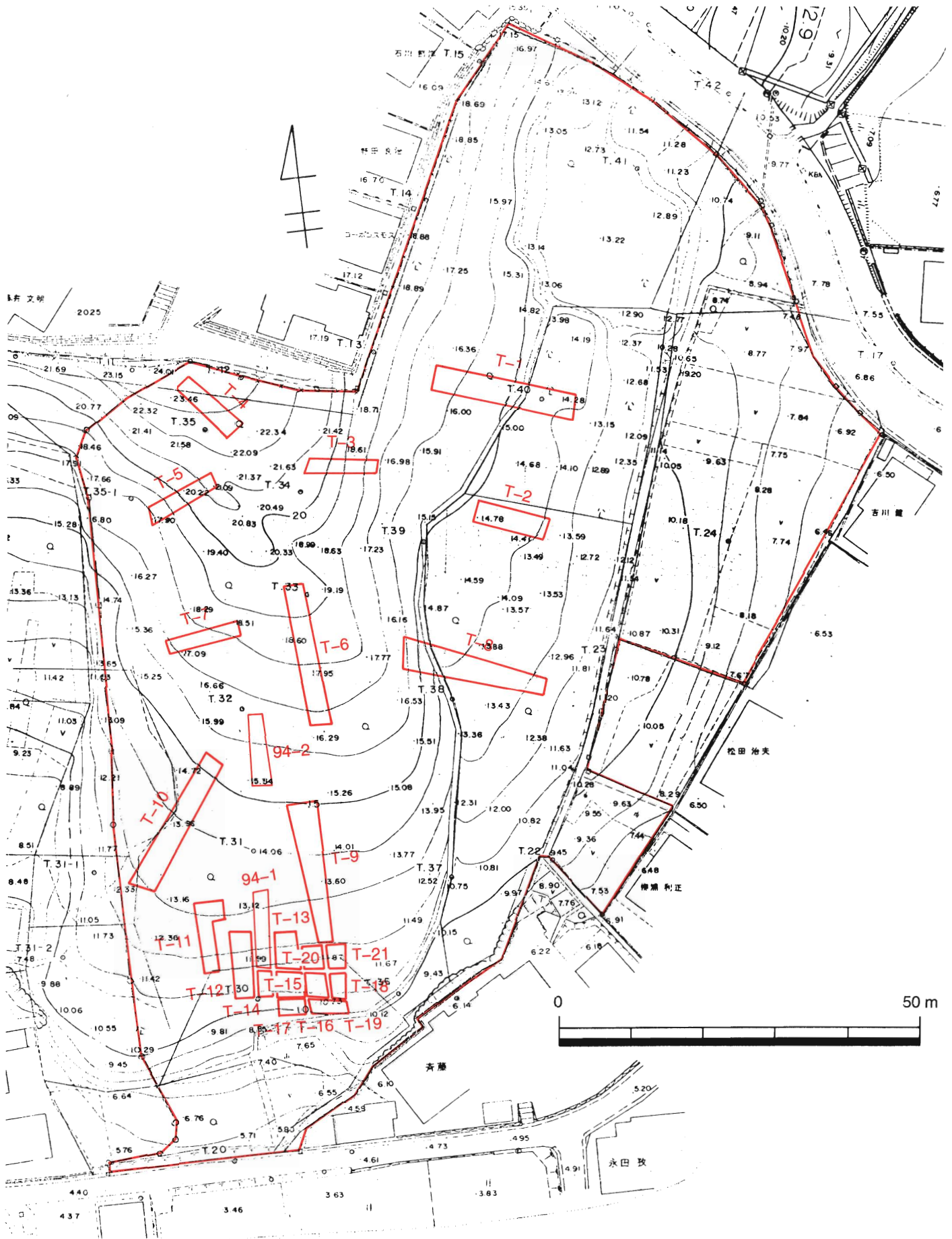
そして消滅していくと共に、集落跡ではあまり見られない滑石製白玉や古式須恵器が出土していることなどから、特別な集落跡ではないかと考えられている⁽⁹⁾。

また柴Ⅱ遺跡(⑭)からは5世紀前半頃の土師器が出土する竪穴式住居跡が2棟と6世紀後半頃の古墳の周溝と思われる溝状遺構が検出されている⁽¹⁰⁾。

古墳時代以降の遺跡の調査例は僅かだが、そのなかで馬込山古墓群(⑮)では2基の土壙墓が検出され、特に2号墓は、当地方では珍しい形態である、火葬地と埋葬地が同一地点であることを示したものであった。この古墓群は埋葬された銭貨から室町時代の墓と推定される⁽¹¹⁾。また、川津城(⑯)などの中世山城が数箇所を確認されているが、その大半は正式な調査がなされておらず詳細な内容は不明である。

(註)

- (1) タテチョウ遺跡については、島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う タテチョウ遺跡発掘調査報告書 I～IV』 1979～1992 がある。
- (2) 西川津遺跡については、島根県教育委員会『朝酌川河川改修に伴う 西川津遺跡発掘調査報告書 I～V』 1980～1989 がある。
- (3) 原の前遺跡については、島根県教育委員会『朝酌川河川改修工事に伴う 埋蔵文化財発掘調査報告書 原の前遺跡』 1995 がある。
- (4) 島根大学埋蔵文化財調査研究センター『島根大学構内遺跡(橋縄手地区)発掘調査概報 I』 1995
- (5) 松江市教育委員会『史跡金崎古墳群 昭和52年度環境整備事業報告書』 1978
- (6) 山本清 「島根大学敷地薬師山古墳遺物について」(『島根大学論集人文科学』第5号 1955)
- (7) 松江市教育委員会『山崎古墳』 1984
- (8) 松江市教育委員会『柴古墳群』 1985
- (9) 松江市教育委員会『堤廻遺跡』 1986
- (10) 島根県教育委員会『主要地方道松江一境線バイパス関係 埋蔵文化財調査報告I』 1976
- (11) 石橋逸郎・近藤正「VI 松江・馬込山古墓群」(島根県教育委員会『島根県埋蔵文化財調査報告書』第Ⅲ集 1971



第4図 第1次調査トレンチ設定図

Ⅲ. 調査の概要

平成6年度の試掘調査は開発予定区域内において2本のトレンチ（94-1、94-2）を設定した調査であったが、この調査内容では本遺跡の広がりや他の遺跡の存在の有無が不明瞭だったので、区域内の東向き緩斜面も含めた全域に新たに10本のトレンチを設定して、平成8年5月20日から7月3日までの約30日間を費やして、第1次調査を実施した（第4図）。その結果、表土の下が地山で遺物も出土しなかったトレンチが5本あった（T-3、T-4、T-5、T-7、T-9）。また若干の遺物は出土したが遺構らしいものは一切検出できなかったトレンチが3本あった（T-2、T-6、T-10）。しかしT-1・T-8では、表土及び旧表土が堆積しその下に濃赤褐色の地山が認められたが、この地山面で径20 cm程の柱穴と思われるピットを検出すると共に奈良・平安時代の須恵器を中心とする遺物が旧表土及び地山面から多く出土した（第5図）。これらのことから、分布・試掘調査時に既に畑及び宅地として開墾・削平され遺跡の存在の可能性はかなり薄いと判断していた、東向き緩斜面でも新たに掘立柱建物跡と思われる遺跡が存在することが分かった。そのために、竪穴式住居跡を検出した南向き緩斜面を「調査南区」、掘立柱建物跡を検出した東向き緩斜面を「調査東区」と便宜上呼ぶことにした。

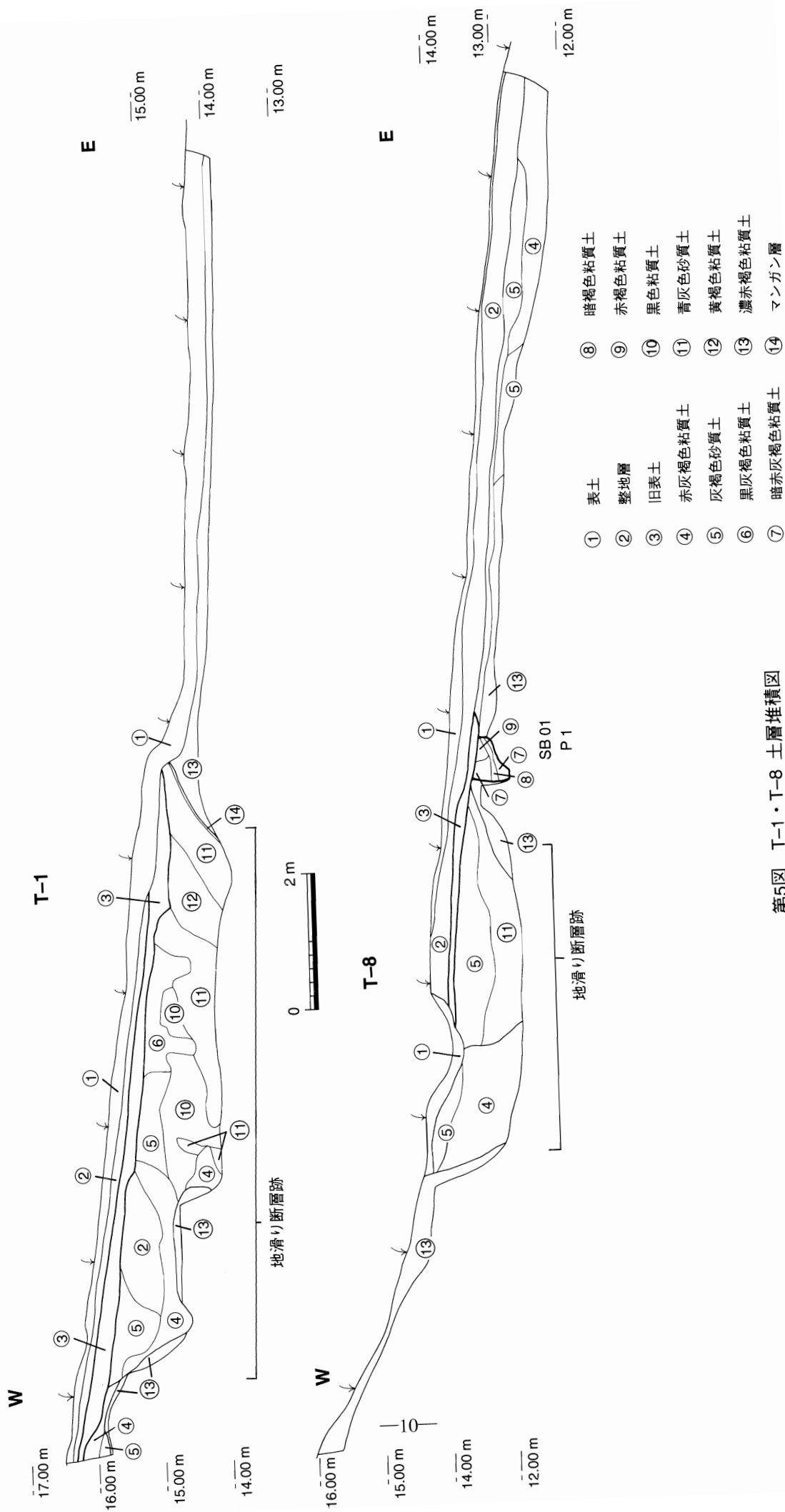
そして第2次調査としては、まず「調査南区」から調査を着手するようにし、その調査過程で「調査東区」の全面伐採及び地形測量をおこない、「調査南区」の調査が終了してから「調査東区」の調査をおこなう計画を立てて、調査を開始した。このために「調査南区」では竪穴式住居跡を検出したT-1の周辺に更に様々な大きさのトレンチを11本（T-11～21）設定し、詳細な調査を実施したが（第4図）、検出した遺構は試掘調査時に確認した竪穴式住居跡1棟のみであった（第6図）。

一方「調査東区」では、全面伐採の後に開発のためのトラバース測量杭の「T-38（X座標；-57299.599 m, Y座標；82965.500 m）」と「T-39（X座標；-57277.575 m, Y座標；82961.125 m）」を基本として、一辺10 mの方眼を組んで（北から南へ1～8、西から東へA～Dとし、例えば「B-6区」などと便宜上呼称した）地形測量をおこなった（第7図）。その後、「B-3区」～「B-7区」の東側に幅4 mのトレンチを設定し調査をおこなったところ、「B-3」、「B-4」、「B-6」、「B-7」の地山面で径20～70 cmを計る柱穴と思われるピットを多数検出すると共に土師器、須恵器を中心とする遺物が多量に出土した。このことから、「調査東区」にはかなり大規模な掘立柱建物跡が存在することが想定された。そして本調査区全域の表土掘削をおこなった後に発掘調査を実施したが、その結果、検出した遺構は竪穴式住居跡が2棟（SI-02,03）、掘立柱建物跡が12棟（SB-01～12）、柵状遺構（以下、柱穴列とする）が3条（SA-01～03）、土壙状遺構が3基（SK-01～03）、であった（第8図）。

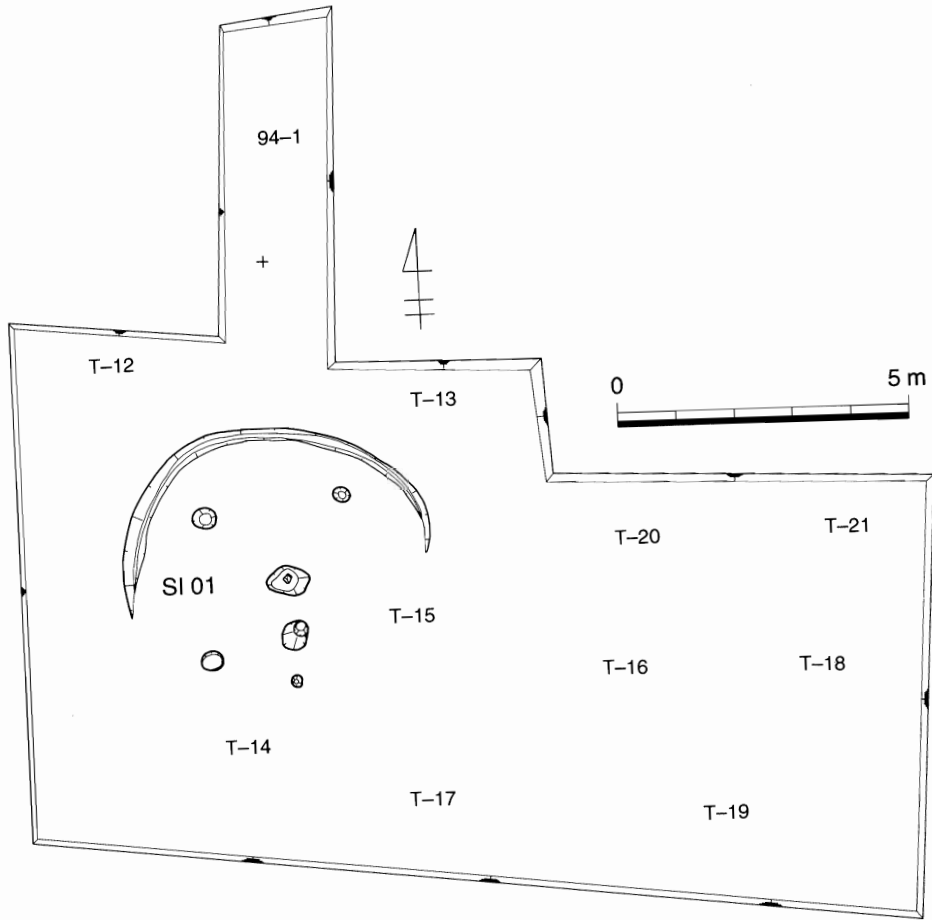
（1）調査南区

① SI-01（第9図）

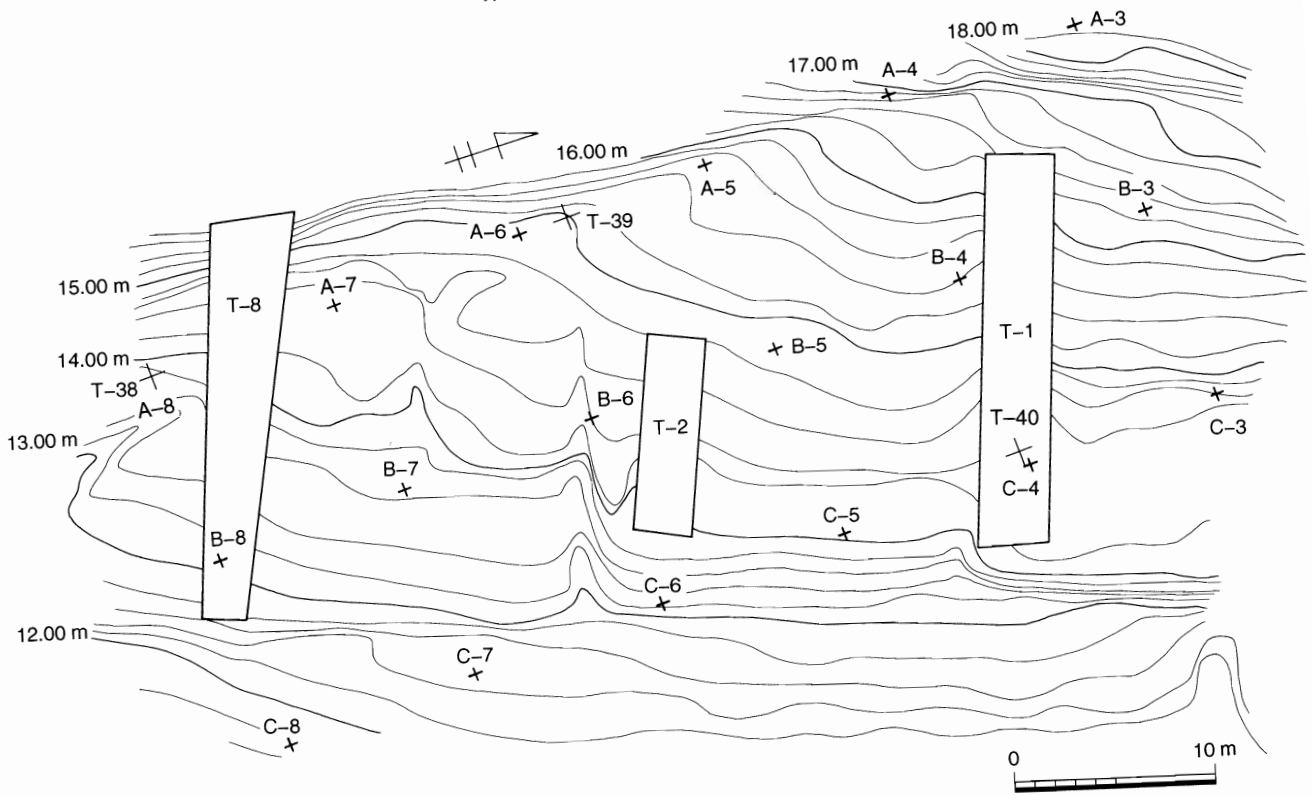
本区中央で検出された竪穴式住居跡で、円形の平面形を呈し推定径4.5～5.0 mを計る。壁及び溝



第5図 T-1・T-8 土層堆積図



第6図 調査南区 調査成果図



第7図 調査東区 地形測量図

は北側では明瞭に残るが、南側半分では消滅して検出できなかった。壁高は北側で最大35 cm、溝はU字状の形態で幅約10 cm、深さ最大7 cmを計る。ピットは計6穴検出した。P 1は径36～40 cm、深さ約40 cmを計り、円形を呈する。P 2は径25～30 cm、深さ約38 cmを計り、円形を呈する。P 3は径約35 cm、深さ約13 cmを計り、円形を呈する。このピット内から土器片が出土したが、細片のためにその詳細は不明であり図示もできなかった。P 4は径50～70 cm、深さ約20 cmを計り、楕円形を呈する。このピットの床面から13×17 cmの自然石が出土した。P 5は径38～56 cm、深さ約30 cmを計り、楕円形を呈する。P 6は径約20 cm、深さ約20 cmを計り、円形を呈する。P 1～P 3は支柱穴と考えるが、南東側の1穴は検出できなかった。またP 4は、竪穴式住居跡でよく見られる中央ピットと思われる。

本住居跡に係る遺物としては、床面などから弥生時代後期（「草田2期」⁽¹²⁾と思われる）の壺形土器の口縁部片などが出土したが、その多くが細片であり図示できたものは2片だけであった（第22図（1）・（2））。

（1）は推定底径6.4 cmを計る平底の底部片で、胴部に向かって大きく開くものだが、風化が激しく調整などは不明である。

（2）は鉢形のミニチュア土器の口縁部片と思われ、推定口径6.5 cmを計る。内湾気味に立ち上がる体部をもち、口縁部は「く」の字形に大きく外反するものである。口縁端部は指で押さえながら成形したものと思われ、指頭圧痕による小さな凹面が連続的に残っている。内外面ともにナデで調整されている。

（2）調査東区

② SI-02（第10図）

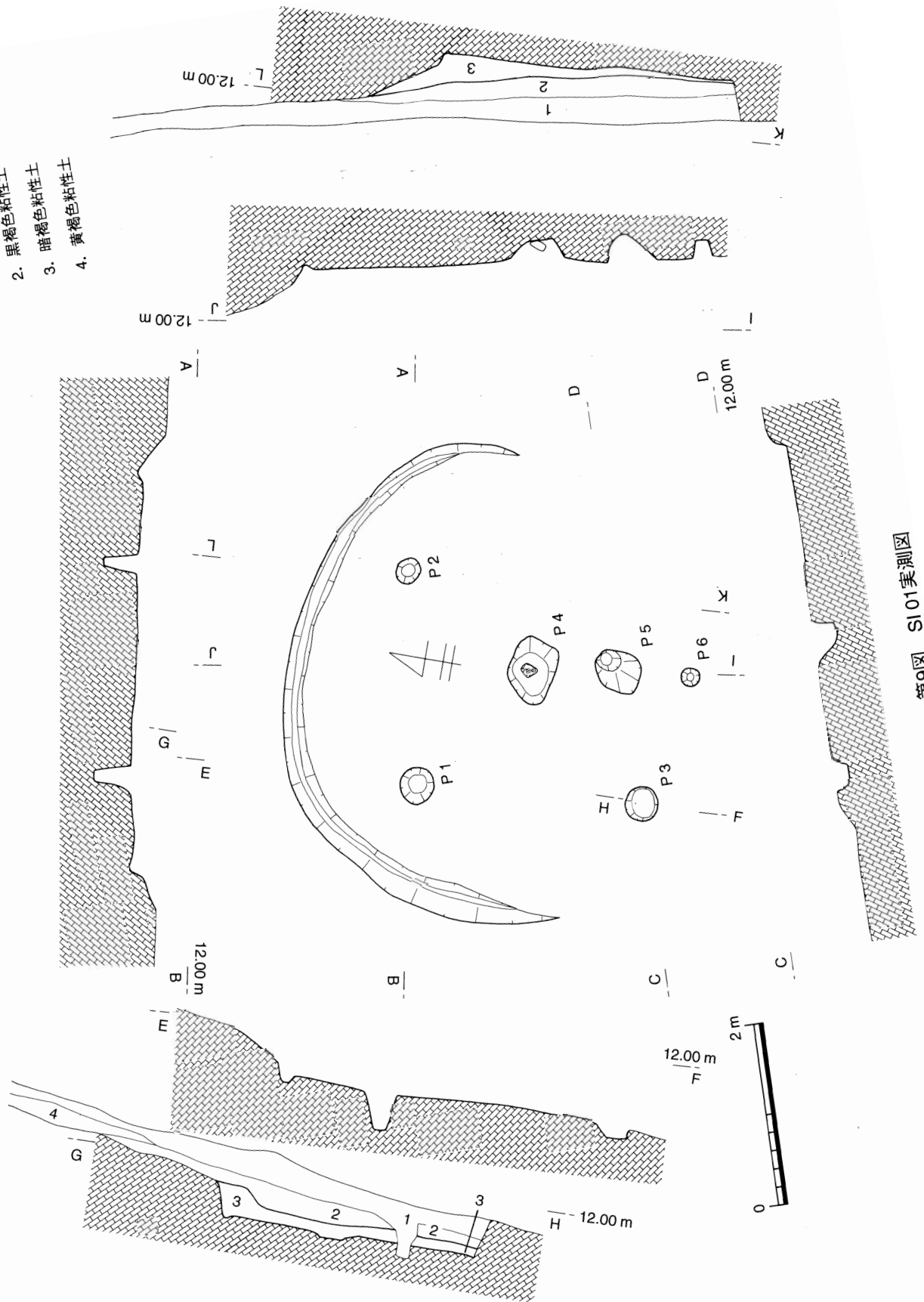
本区南側で検出された竪穴式住居跡で、隅丸方形の平面形を呈し一辺約4.6 mを計る。壁及び溝は北～西側では明瞭に残るが、東～南側では消滅しており検出できなかった。壁高は西側で最大47 cm、溝はU字状の形態で幅約7 cm、深さ最大5 cmを計る。また壁等の一部が、後述するSB-02,06の柱穴によって壊されている。ピットは計4穴検出した。P 1は径20～39 cm、深さ約40 cmを計り、楕円形を呈する。P 2は径25～40 cm、深さ約58 cmを計り、楕円形を呈する。P 1・2から土器片が出土したが、共に細片のために詳細は不明である。P 3は径約35 cm、深さ約48 cmを計り、円形を呈する。P 1～3は支柱穴と考えるが、東側の1穴はサブトレンチのために検出できなかった。P 4は径55～70 cm、深さ約32 cmを計り、楕円形を呈する。このピットの床面から11×18 cmの火を受けて赤く変色した割石が1個出土した。またこのピットからも土器片が出土したが、共に細片のために詳細は不明である。このピットは、竪穴式住居跡でよく確認される中央ピットと思われる。そしてこの周辺の床面で炭を伴った焼土が数箇所検出された。

この住居跡に係る遺物としては、床面などから弥生時代終末期頃の土器などが出土したが、その多くが細片であり図示できたのは数片だけであった（第22図（3）～（11））。

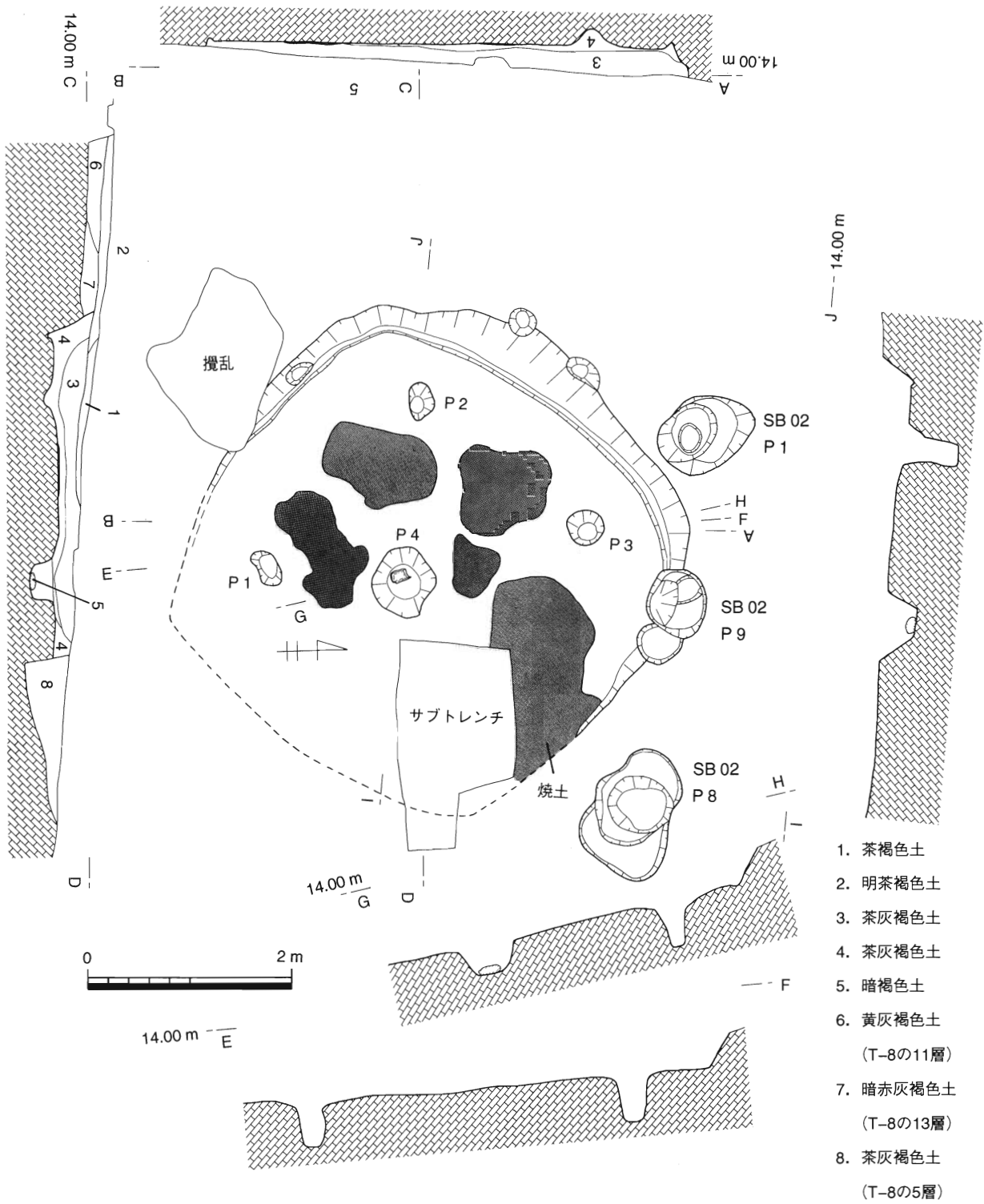


第8図 調査東区 調査成果図

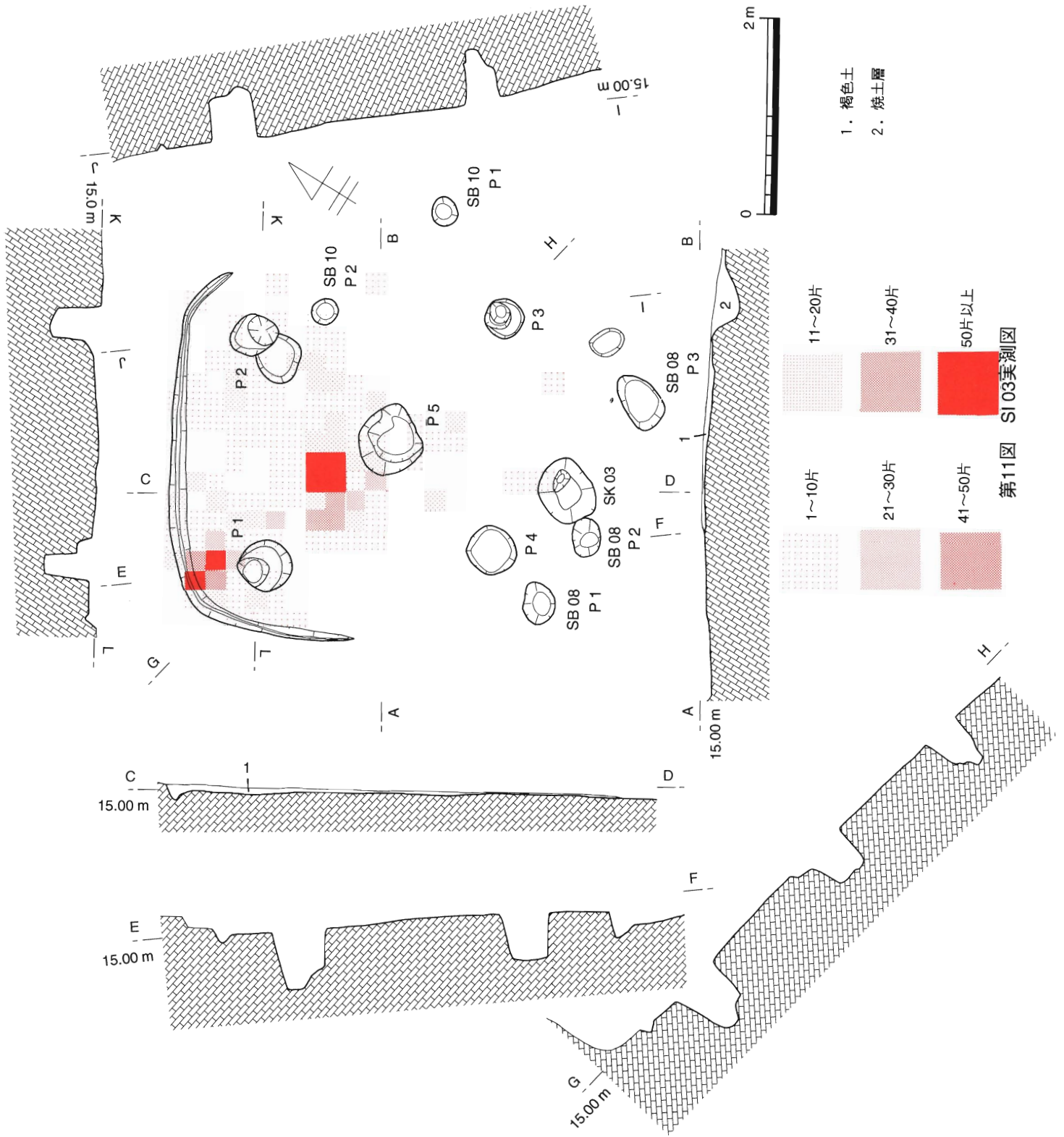
- 1. 表土 (褐色土)
- 2. 黑褐色粘性土
- 3. 暗褐色粘性土
- 4. 黄褐色粘性土



第9图 SI01实测图



第10図 SI 02実測図



第11図 SI 03実測図

(3)は甕形土器の頸部片で、推定頸部径**12.2 cm**を計る。口縁部は稜から内傾気味に立ち上がると思われ、稜はさほど突出していないが水平方向に突出するものである。内外面ともに風化が著しく器面調整などは不明だが、複合口縁部の稜の突出の形状からみると「草田5期」と思われる。

(4)～(8)、(10)・(11)は甕形土器の口縁部片だが、細片のために口径は計測できなかった。内外面ともに風化が著しく器面調整などは不明だが、口縁部の稜はさほど突出していないが水平方向に若干突出している。複合口縁部の稜の突出の形状からみると、(3)と同様に「草田5期」と思われる。

(9)は高坏の坏部片で、推定口径**17.4 cm**を計る。丸みを帯びた体部から緩やかに外反して口縁端部に至るものである。内外面ともに風化が著しく、器面調整などは分かりにくいが一部にヘラミガキと思われる調整痕が残っている。その特徴から「草田6期」と思われる。

③ SI-03 (第11図)

本区中央西端部で検出された竪穴式住居跡で、隅丸方形の平面形を呈し一辺約**4.1 m**を計る。この住居跡は、SB-08,10の掘立柱建物跡や現代の開墾によりかなりの削平を受けており、壁及び溝は北西側～南西側の一部でしか検出できなかった。一番残存状況が良い西側の壁高でも僅か**18 cm**程しか、また溝もU字状の形態で幅約**7 cm**、深さ最大**5 cm**しか計れなかった。この溝中から青メノウの剥片及び土器細片が出土した。ピットは計5穴であった。P1は径**52～55 cm**、深さ**47 cm**を計り、円形を呈する。P2は径**39～50 cm**、深さ**53 cm**を計り、楕円形を呈しており、径約**15 cm**の柱痕も認められた。P3は径**40 cm**、深さ**48 cm**を計り、円形を呈する。P4は径**50 cm**、深さ**45.9 cm**を計り、円形を呈しており、径約**20 cm**の柱痕も認められた。また、P1,P2,P4からは青メノウの剥片や土器の細片が出土したが、細片のためその詳細は不明である。P5は径**62～75 cm**、深さ**39.2 cm**を計り、楕円形を呈する。このピットは、SI-01,02でも見られた中央ピットと思われ、炭・焼土・青メノウの剥片と共に土器片が出土した。またこの周辺の床面では炭を伴った焼土が数箇所検出された。

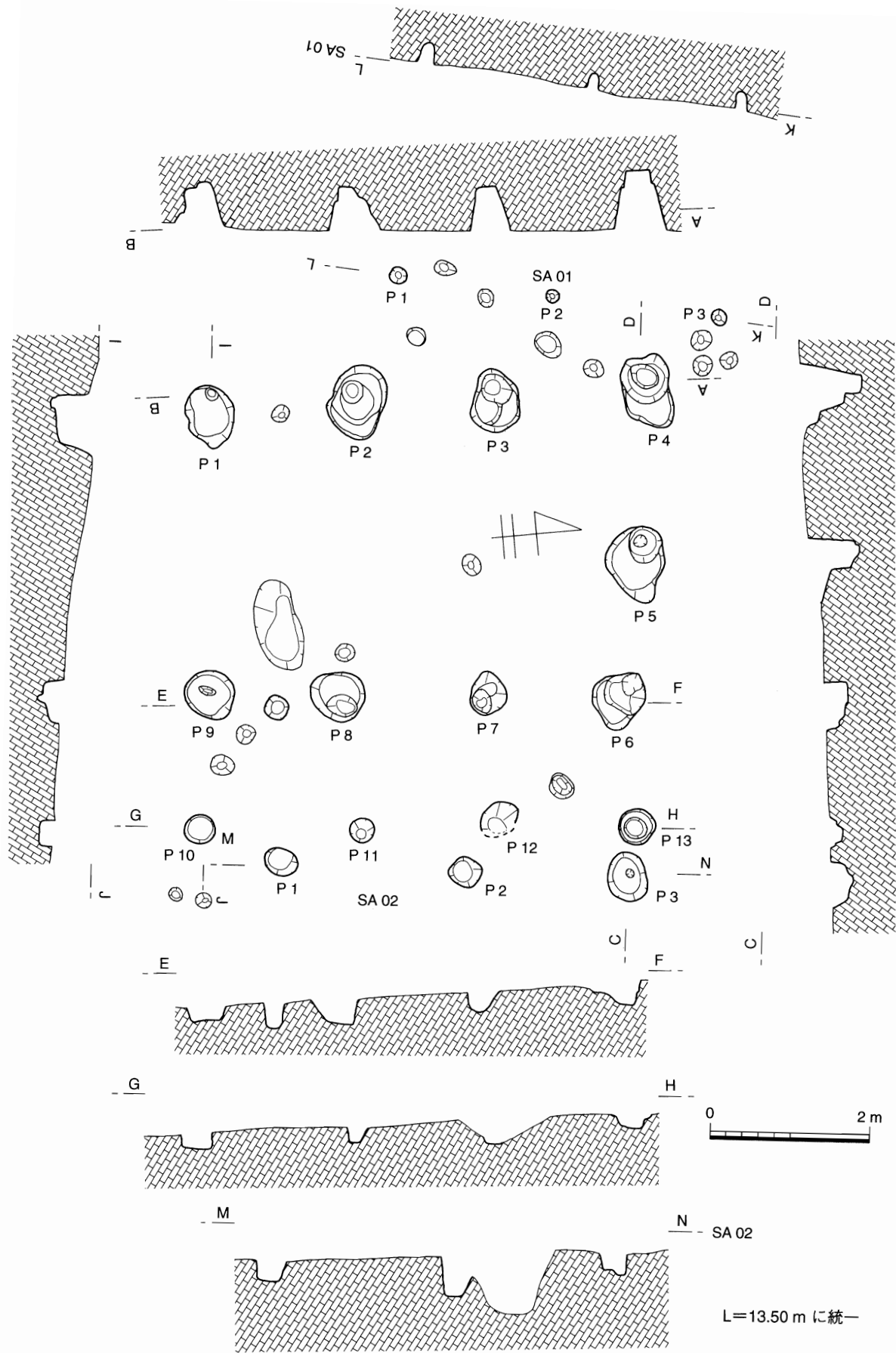
さて、攪乱が少なかったSI-03の北側半分の床面などから**1000**点を越える夥しい数量の青メノウの剥片と鉄器と思われる少片が出土した。その出土状況を検討するために、便宜的に**20 cm**四方のグリッドを作りドットを落として取り上げたところ、P1,P5の周辺で特に集中する傾向がありこれは焼土の分布地点と重複している。青メノウの剥片の出土点数が一番多いグリッドでは**152**点を数えた。鉄器と思われる少片については、細片のために種類など詳細は不明であった。

この住居跡に関係する遺物としては、青メノウ、鉄器片の他に弥生時代終末期頃の土器が出土したが、その多くが細片であり図示できたのは1片だけであった(第22図(12))。

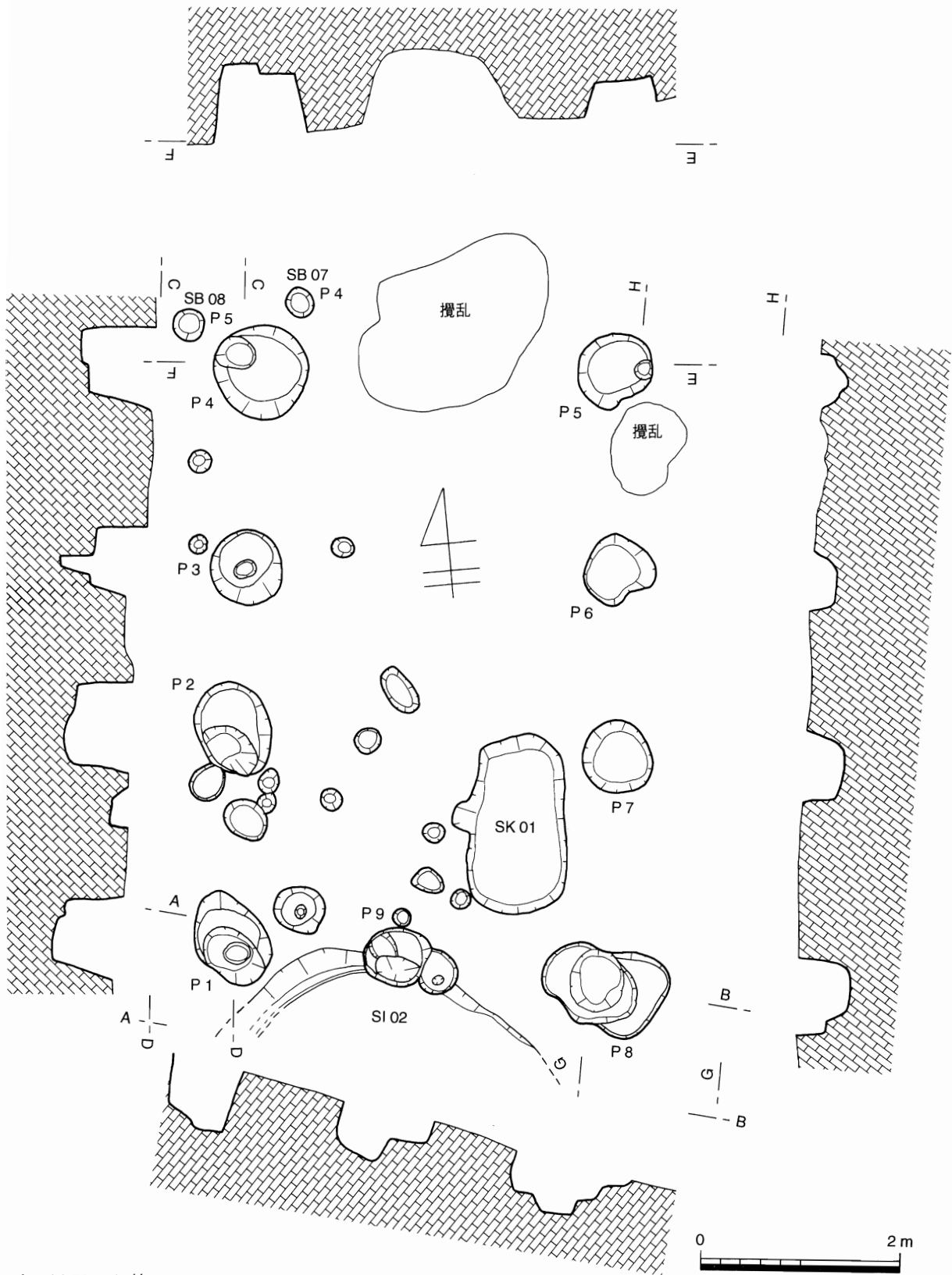
(12)はP5より出土した口縁端部片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁部外面の一部に貝殻復縁と思われるクシ状工具による平行線文を施している。内面にはヘラミガキと思われる調整痕が若干残っている。これらの特徴より「草田3期」と思われる。

④ SB-01 (第12図)

本区南端部で検出された、南北棟の側柱掘立柱建物跡で東側に庇を有する。また柱穴列が本建物跡

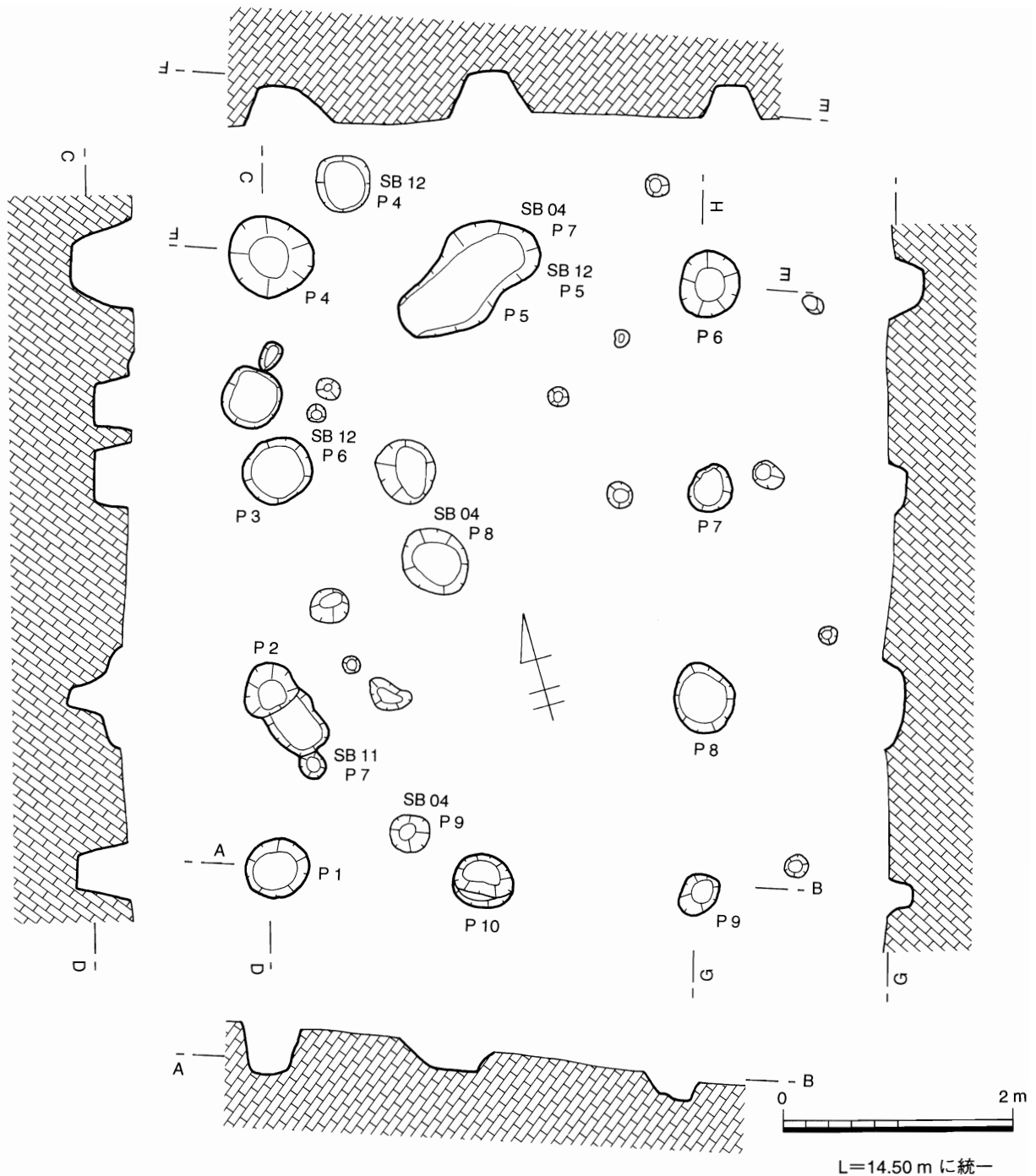


第12図 SB 01・SA 01・SA 02 実測図



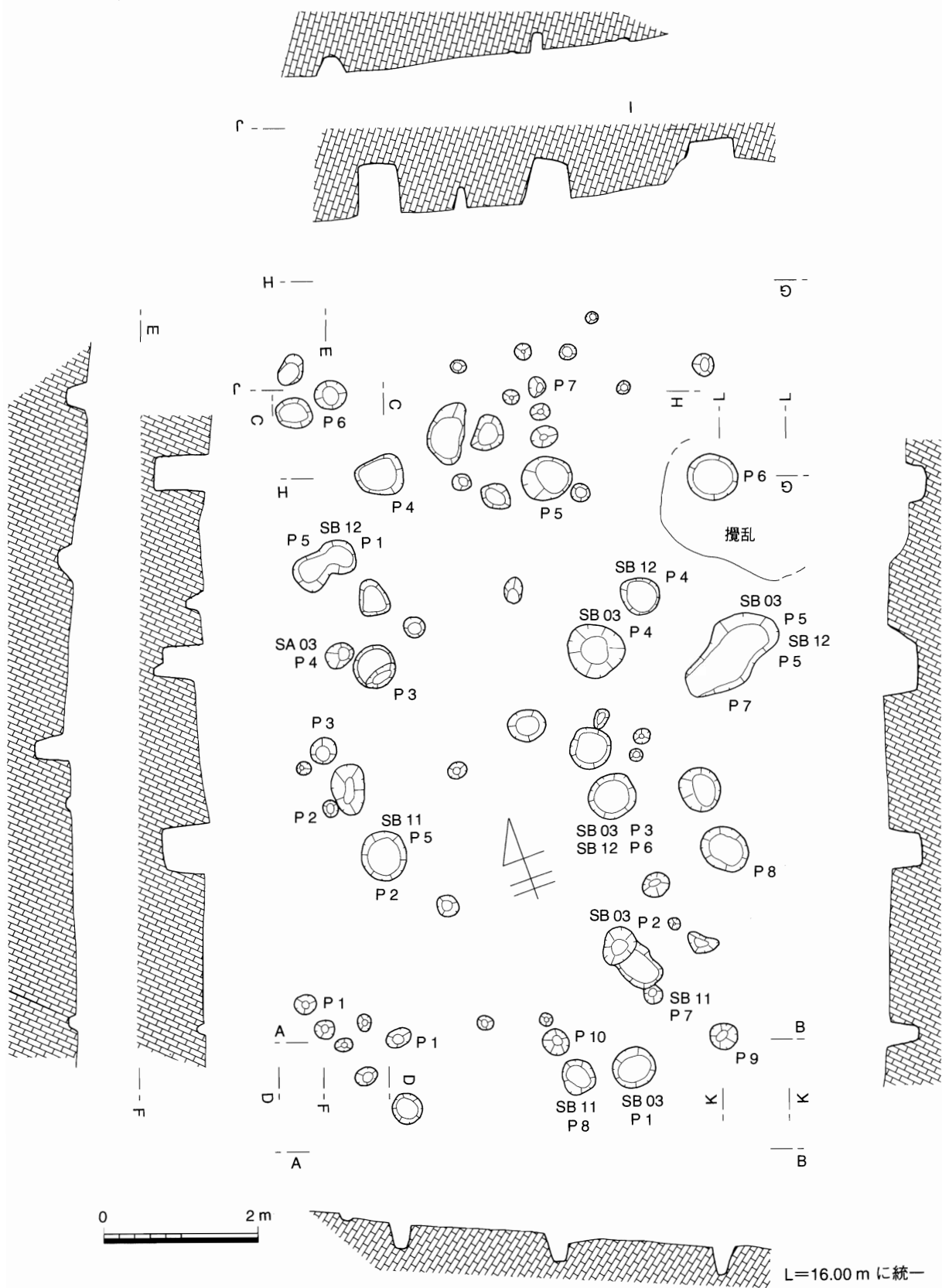
L=14.50 m に統一

第13図 SB 02・SK 01 実測図

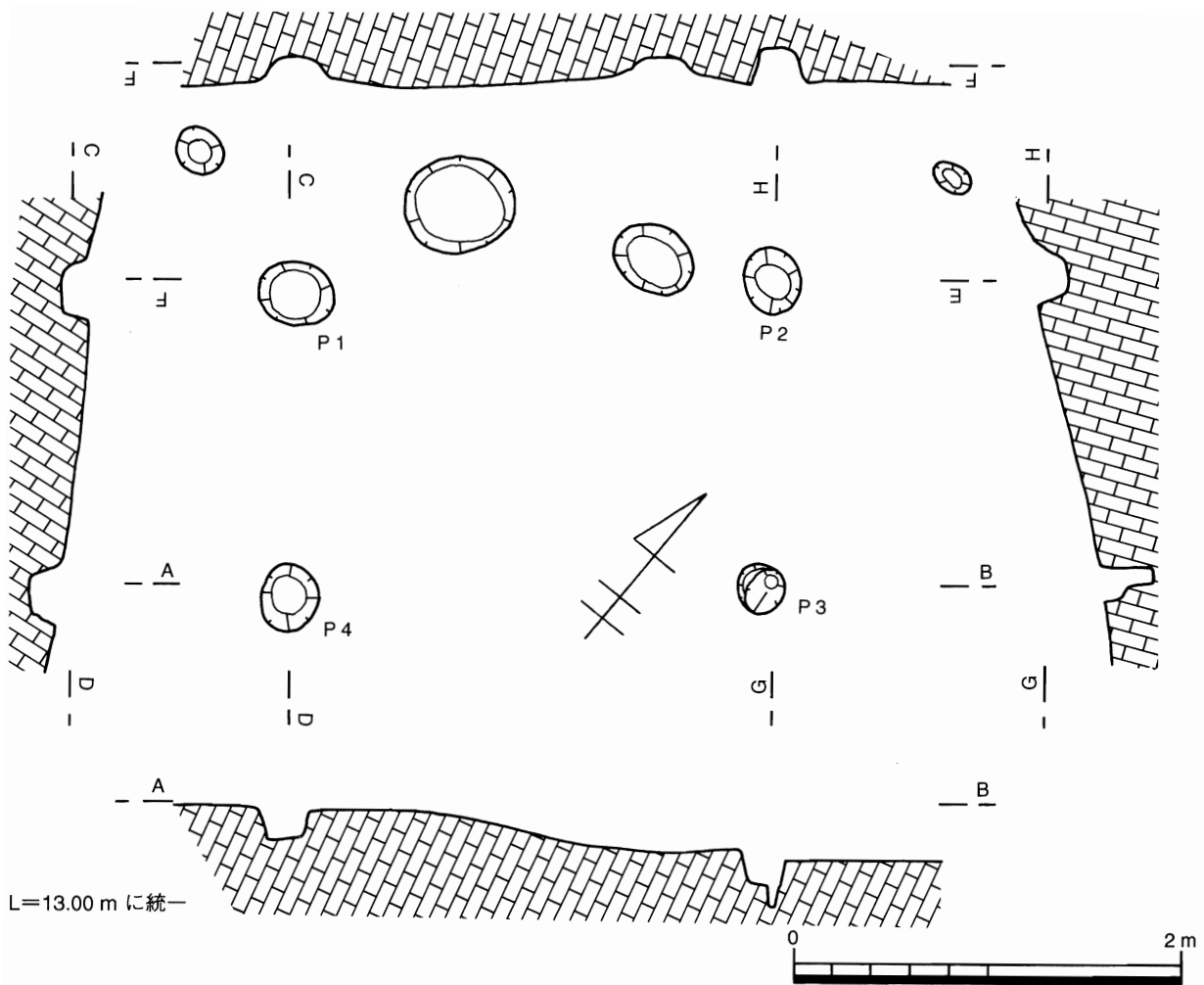


第14図 SB 03 実測図

の西側 (SA-01) と東側 (SA-02) に2条確認された。桁行3間 (5.45 m)、梁行2間 (3.93 m)、21.42 m²の床面積を持ち、棟方向は N-6°10′—E である。柱穴は計13穴検出したが、南側の梁行中央柱は検出できなかった。それらの柱間寸法は桁行で1.82 m、梁行1.84 m、2.09 m を計り、底までのそれは1.84 m を計る。柱穴の掘り方は総て円形～楕円形を呈し、径0.35×0.3 m～0.98×0.71 m、深さ0.14 m～0.94 m を計る。このうち、P 2,P 3,P 4,P 13は中程の深さにテラスをつくり二段掘りの状態であり、P 1,P 2,P 3,P 5,P 6,P 7,P 8,P 9の床面では、径10～40 cm、深さ5～10 cm の凹みが確認された。



第15図 SB 04・SA 03 実測図



第16図 SB 05 実測図

また P 1,P 3,P 4,P 8,P 9の裏込め土は赤褐色土と黒褐色土が互層状に詰められており、P 5,P 11では径約15 cm を計る柱痕が検出された。

P 1,P 11,P 13以外の柱穴から土器片などが出土しており、それらは「草田2期」～「草田6期」、「高広Ⅱ期」～「高広Ⅳ期」⁽¹³⁾の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広ⅣB期」と思われる。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは5片しかなかった(第22図(13)～(17))。

(13)はP 4から出土した須恵器の坏蓋の口縁部片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁端部は屈曲のみで下垂していない。天井部外面には回転ヘラケズリを施している。その特徴より「高広ⅡB期」と思われる。

(14)はP 4から出土した須恵器胴部片であり、外面にはやや幅が広い格子状の叩き痕が、内面には同心円状の当具痕が明瞭に残っている。

(15)はP 4から出土した須恵器の坏蓋口縁部片で、内面にかえりが付く。P 7から出土した(17)も同様な坏蓋口縁部片である。ともに細片であり、口径は計測できなかった。「高広ⅡB期」と思われる。

(16)はP 5から出土した土師器と思われる口縁部片であるが、細片のために口径は計測できなかった。外反して端部に至るものであるが、内外面ともに風化が著しく器面調整などの詳細なことは不明

である。

④ SA-01・SA-02 (第12図)

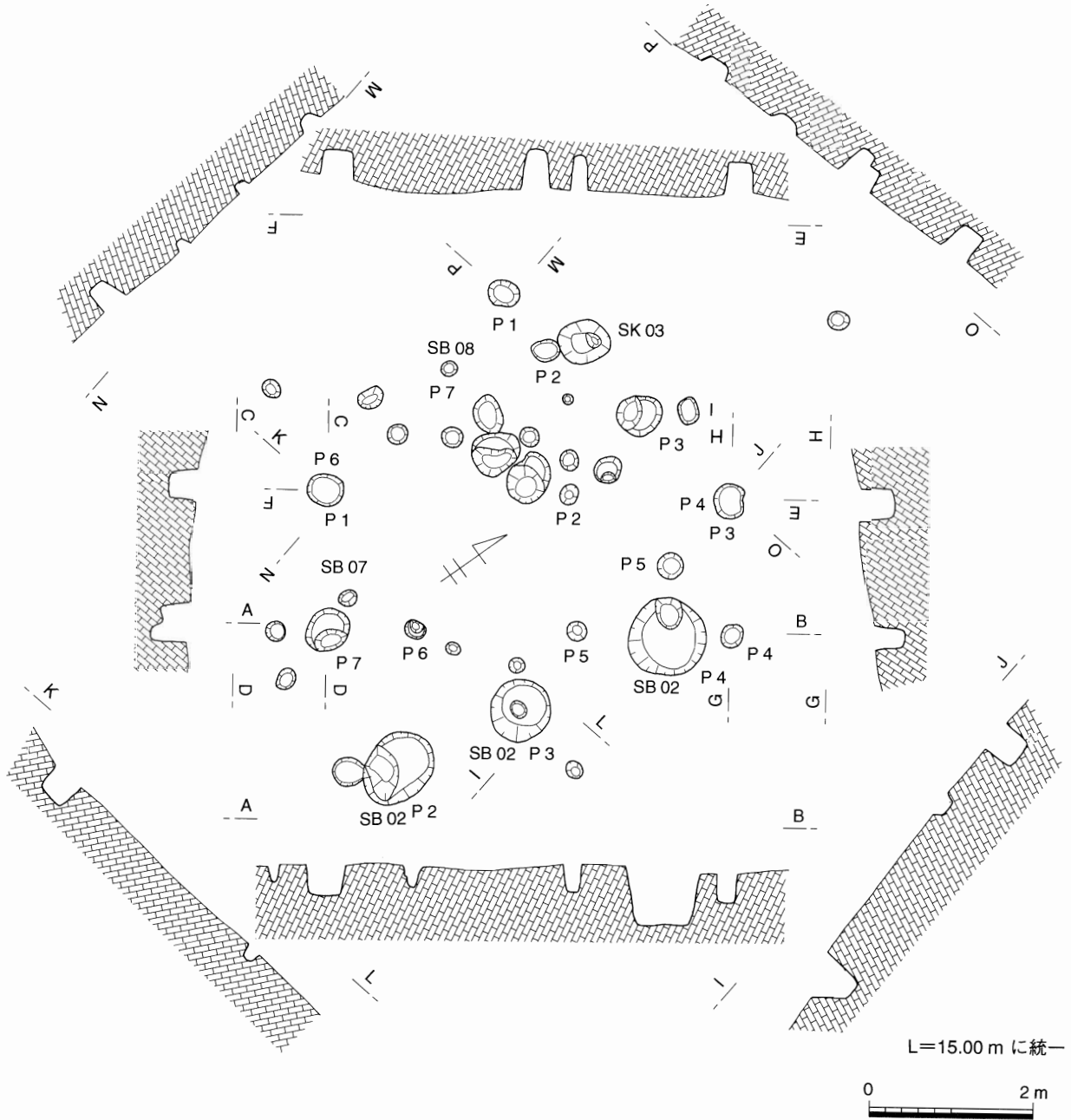
SA-01は2間(4.1 m)以上の柱穴列であり、その方向はN-13°-Eを示す。柱穴は円形の掘り方であり、径0.17×0.16 m~0.22 m×0.2 m、深さ0.2 m~0.25 mを計る。SA-02は2間(4.5 m)以上の柱穴列であり、その方向はN-7°30'-Eを示す。柱穴は円形の掘り方であり、径0.42×0.34 m~0.64×0.48 m、深さ0.27 m~0.51 mを計る。また、SA-02のP1,P2から土器片などが出土したが、細片でありその詳細は不明である。

⑤ SB-02 (第13図)

本建物跡はSI-02の北側で検出された南北棟の側柱掘立柱建物跡である。南側梁行はSI-02の北側壁の一部を壊して柱穴がつくられており、西側桁行の北側はSB-07,08と重複している。また身舎内の東南隅にはSK-01が確認された。桁行3間(6.28 m)、梁行2間(3.72~4.02 m)、24.87m²の床



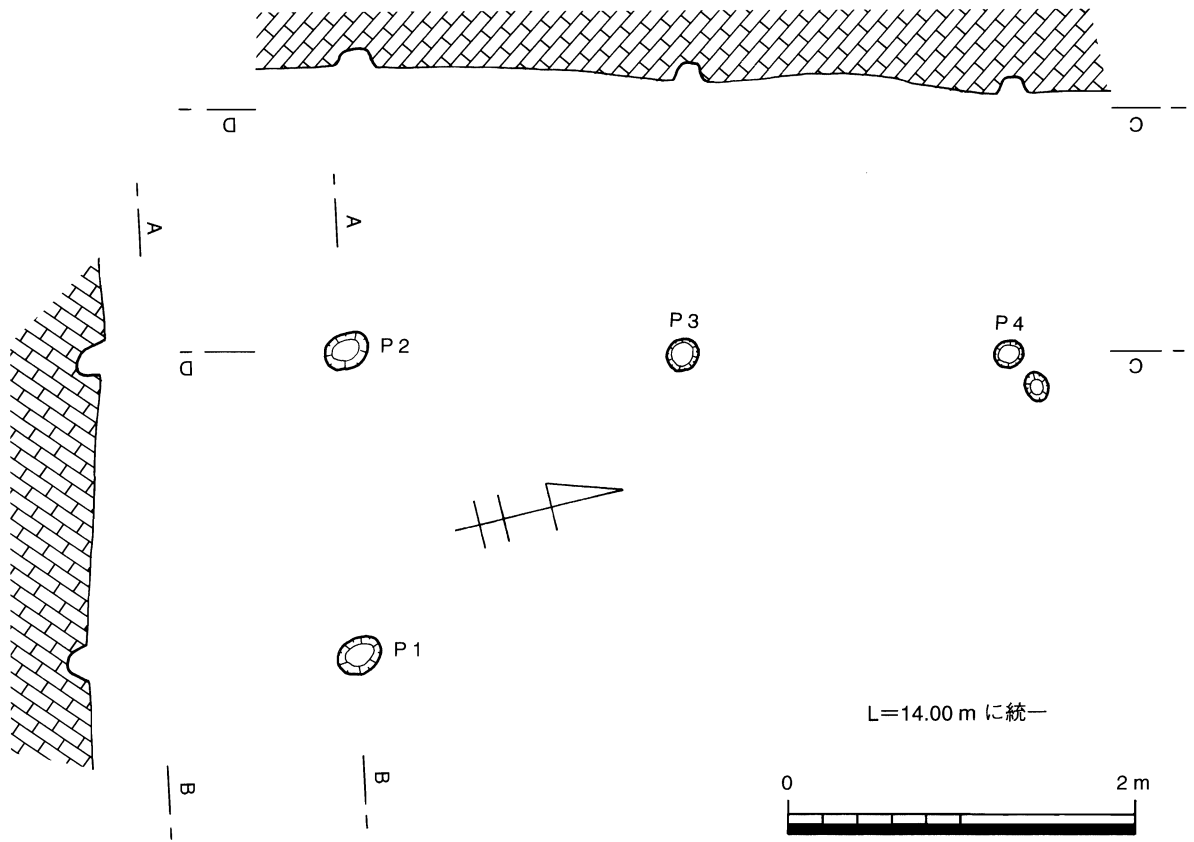
第17図 SB 06 実測図



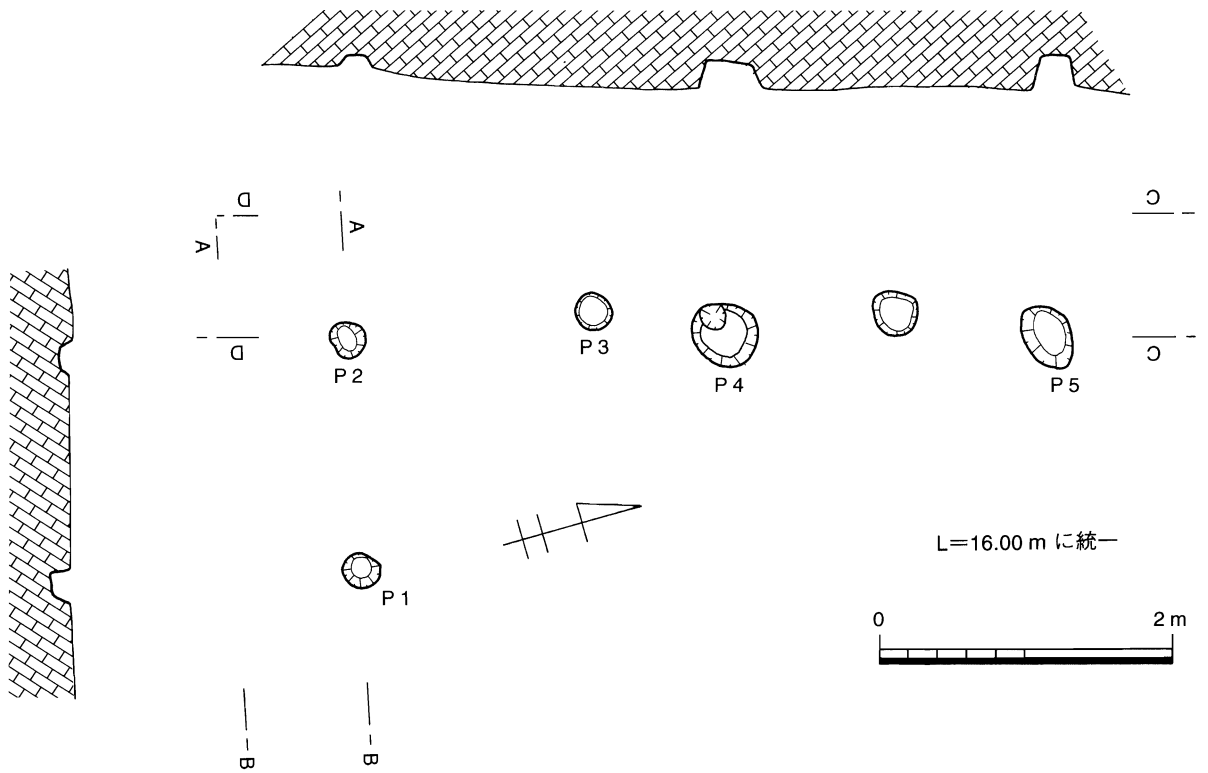
第18図 SB 07 SB 08 SK 03 実測図

面積を持ち、棟方向は $N-8^{\circ}40'-E$ である。柱穴は計9穴検出したが、北側の梁行中央柱は攪乱により検出できなかった。それらの柱間寸法は桁行で2.17 m、1.84 m、2.27 m、梁行1.60 m、2.12 m を計る。柱穴の掘り方は総て円形～楕円形を呈し、径0.60×0.69 m～1.30×0.78 m、深さ0.30～0.88 m を計る。このうち、P 1,P 3,P 4,P 5は中程の深さにテラスをつくり二段掘りの状態であり、P 2,P 9では、径25～60 cm、深さ5～10 cm の凹みが確認された。また P 1,P 2,P 3,P 4,P 7,P 9の裏込め土は赤褐色土と黒褐色土が互層状に詰められており、P 3では径約20 cm を計る柱痕が検出された。

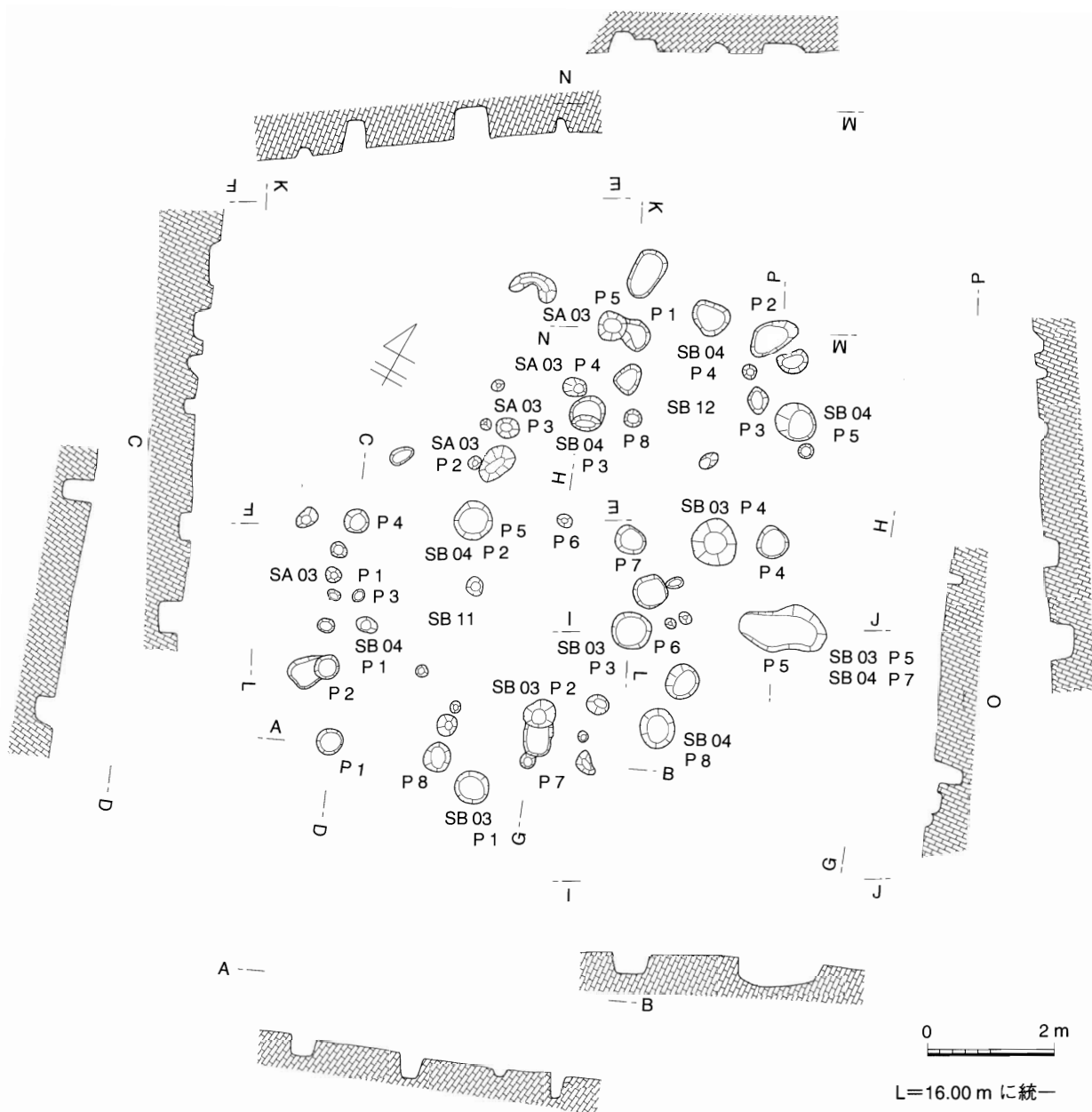
P 5,P 6以外の柱穴から土器片などが出土しており、それらは「草田2期」～「草田6期」、「高広Ⅱ期」～「高広Ⅳ期」の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広ⅣB期」と思われる。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは5片しかなかった(第22図(18)～(22))。



第19図 SB 09 実測図



第20図 SB 10 実測図



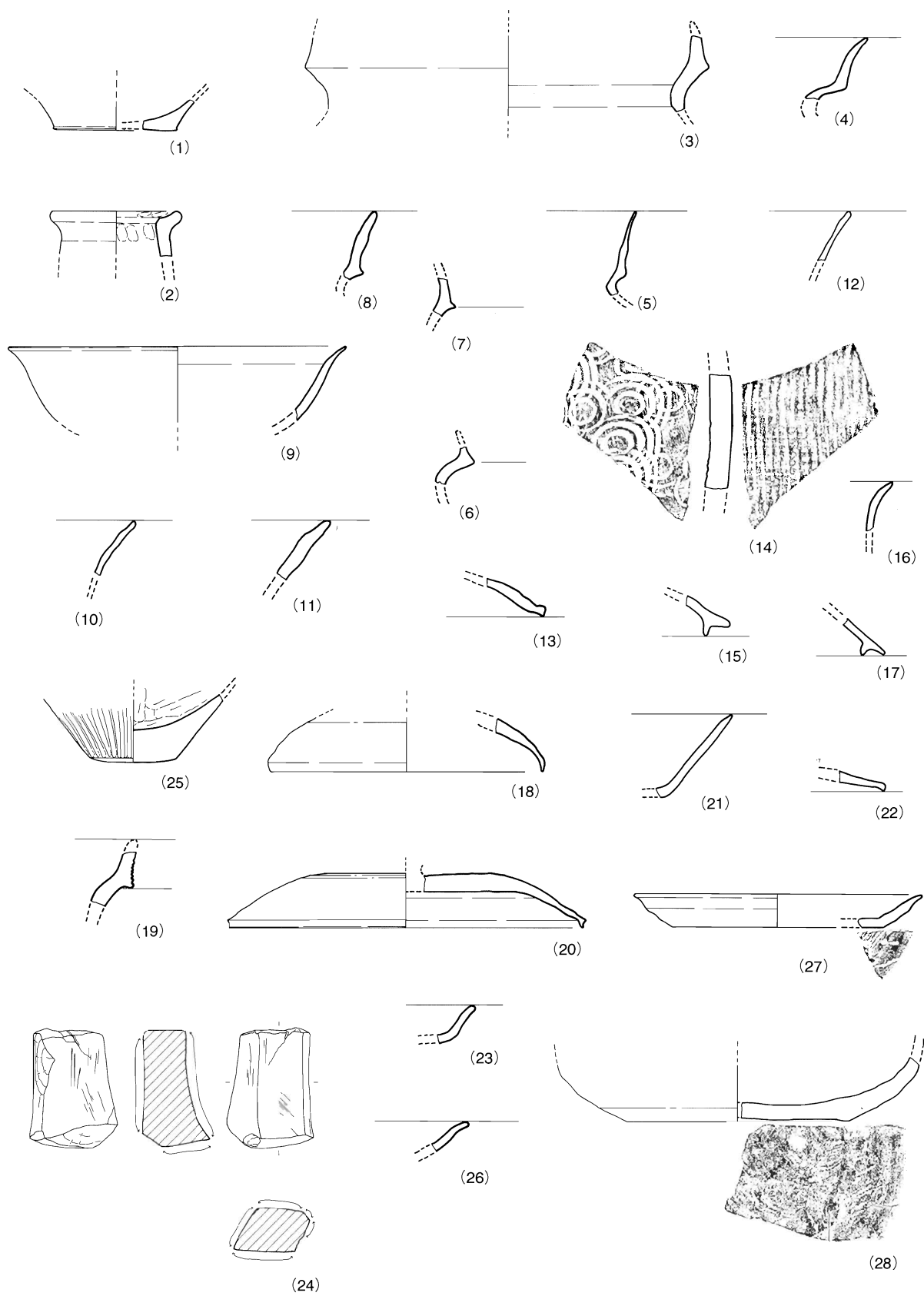
第21図 SB 11・SB 12 実測図

また、P 7から出土した土器片の内の一片は SI-02出土の土器〔第22図(6)〕と同一個体と思われる。この他 P 4から土器とともにスラッグと思われる塊が2個ほど出土した。

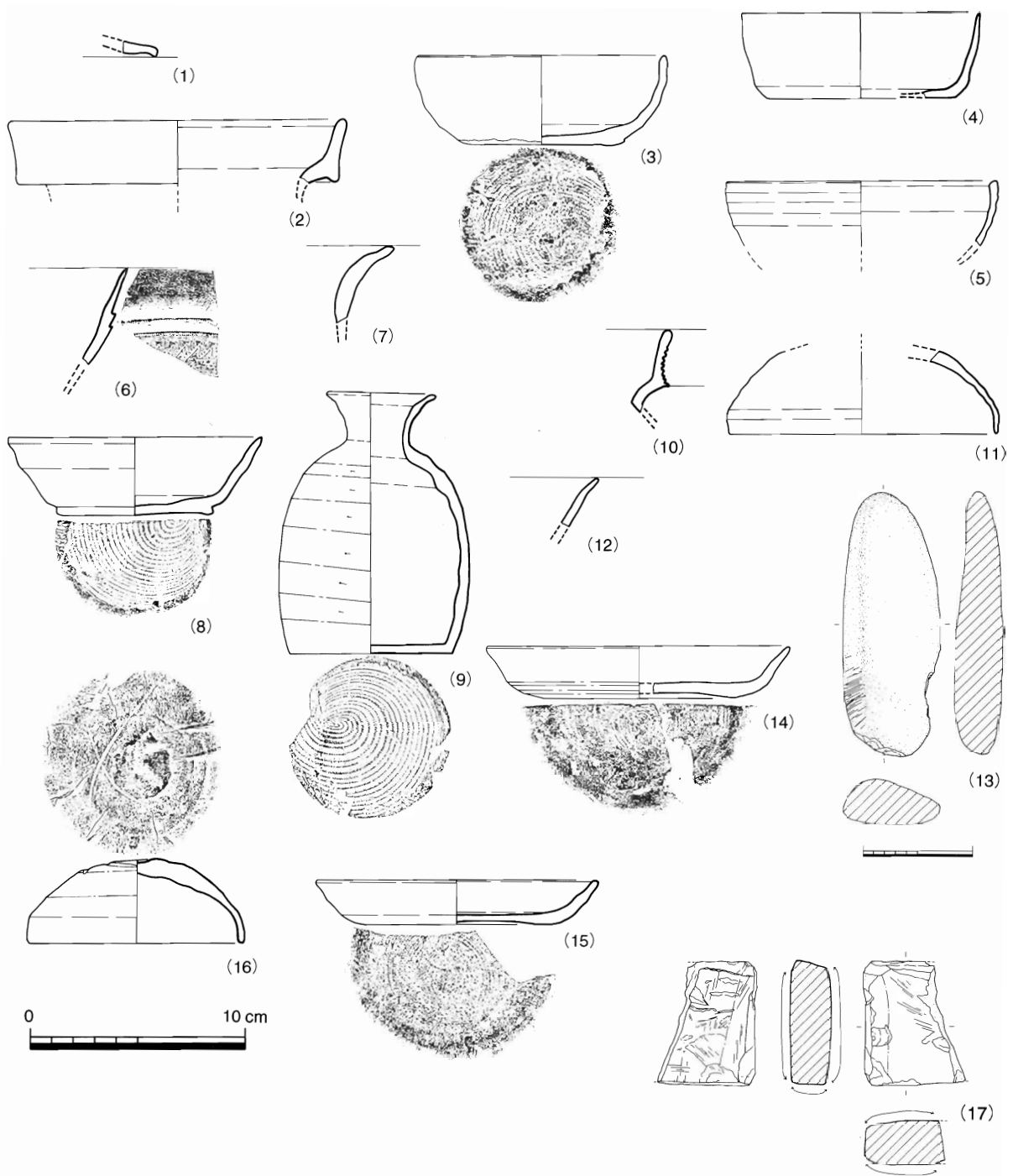
(18) は P 1から出土した須恵器である。小型の坏蓋口縁部片で、推定口径13.9 cm を計る。天井部外面はヘラ切りの後ナデ調整を行っている。その特徴より「高広ⅡA 期」と思われる。

(19) は P 2から出土した甕形土器片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁部外面にはヘラ状工具による擬凹線文を6条以上描いている。内面はナデを施す。内外面に朱塗りが認められる。その特徴より「草田2期」と思われる。

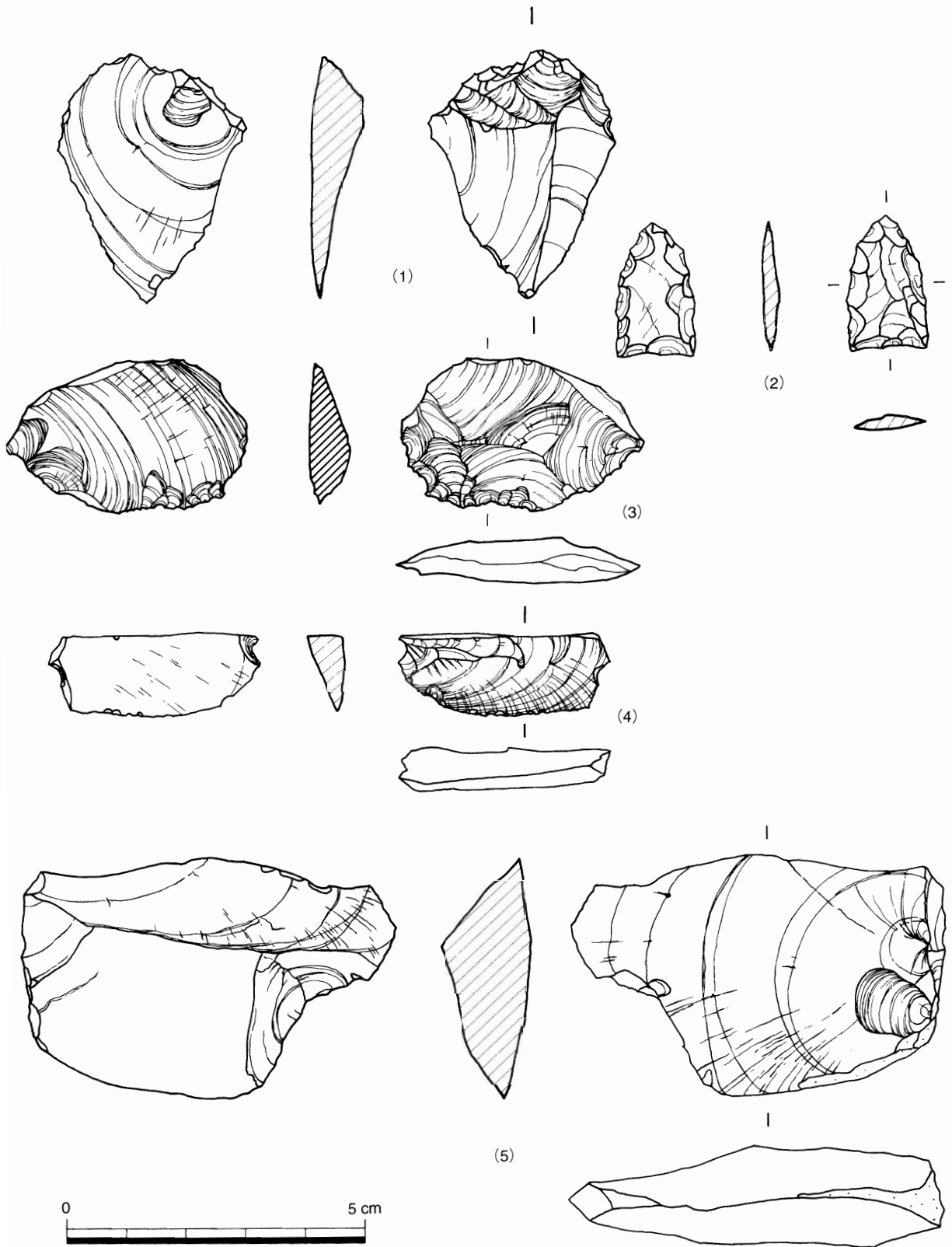
(20) は P 4から出土した須恵器の坏蓋片で、推定口径18.1 cm、器高2.8 cm を計る。口径の割には高さが低いもので、口縁端部は屈曲のみである。天井部外面にはロクロ回転時計回り方向のヘラ削



第22図 遺物実測図 (1)



第23図 遺物実測図 (2)



第24図 遺物実測図 (3)

りを施す。「高広ⅣB期」と思われる。

同じP4から出土した(21)は須恵器の坏片だが、細片のために口径は計測できなかった。底部端部より直線的に伸びて口縁部に至る。焼きが甘く生焼け状態である。風化が著しく器面調整などは不明であるが、(20)と同じく「高広ⅣB期」に入ると思われる。

(22)はP9から出土した須恵器の坏蓋片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁端部の形態的特徴が(20)と類似していることから、「高広ⅣB期」と思われる。

⑥ SK-01 (第13図)

本土壇は南北に長い隅丸方形の平面形を呈し、1.84×1.0 m、深さ0.26 mを計る。本土壇内は黒褐色土が堆積している。

本土壇から若干の遺物が出土したが、実測できたのは2点しかなかった(第22図(23)・(24))。

(23)は須恵器の坏片だが、細片のために口径は計測できなかったが、形態的特徴より「高広ⅣB期」と思われる。

(24)は砥石で、6.2 cm×4.5 cm、最大厚3.5 cmを計る。4面に砥面が認められる。泥岩質と思われる。

⑦ SB-03 (第14図)

本建物跡は調査区北側中央でSB-04,11,12と重複する状態で検出された、南北棟の側柱掘立柱建物跡である。桁行3間(5.42 m)、梁行2間(3.82 m)、20.7 m²の床面積を持ち、棟方向はN-16° 40′—Eである。柱穴は計10穴検出した。それらの柱間寸法は桁行で1.58 m,1.94 m,1.88 m,1.86 m,1.94 m,1.60 m、梁行で1.91 mを計る。柱穴の掘り方は総て円形～楕円形を呈し、径0.38×0.30 m～0.64×0.54 m、深さ0.14 m～0.5 mを計る。このうちP2はSB-11と、P3はSB-12と、P5はSB-04,12と各々重複しており、それらの形状は変形していた。またP2は3個の柱穴が接しており、建て替えられたような様相を呈していた。P10では径37×27 cm、深さ8.5 cmの凹みが確認された。

P1,P2,P3,P4,P5,P9の各柱穴から土器片などが出土したが、殆どが細片でありその詳細は不明である。

⑧ SB-04 (第15図)

本建物跡はSB-03と重複する状態で検出された、南北棟の側柱掘立柱建物跡である。本建物跡の西側と北側に柱穴列が確認された(SA-03)。桁行3間(7.34 m)、梁行2間(4.25 m)、31.2 m²の床面積を持ち、棟方向はN-19° 10′—Eである。柱穴は計10穴検出した。それらの柱間寸法は桁行で2.40 m,2.55 m,2.38 m,2.41 m,2.55 m,2.38 m、梁行で2.13 m,2.11 m,2.11 m,2.15 mを計る。柱穴の掘り方は総て円形～楕円形を呈し、径0.35×0.22 m～0.63×0.55 m、深さ0.30 m～0.68 mを計る。このうちP2はSB-11と、P5はSB-12と、P7はSB-03,12と各々重複しており、それらの形状は変形していた。P3では径30×7 cm、深さ12.2 cmの凹みが確認された。またP3,P5,P8の裏込め土は赤褐色土と黒褐色土が互層状に詰められており、P2,P3,P8では径11～17 cmを計る柱痕が検出された。

P3以外の柱穴から土器などが出土しており、それらは「草田6期」、「高広IA期」～「高広IVB期」の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広IVB期」と思われる。しかしこれらの殆どは細片であり実測できるものはなかった。この他P4から焼土が、P5から青メノウが出土した。

⑨ SA-03 (第15図)

本柱穴列はSB-04の西側桁行と北側梁行にほぼ平行に並び桁行5間(8.36 m)以上、梁行1間(2.76 m)以上の規模を持つものであり、その方向はN-19°45′—Eを示す。柱間寸法は桁行で2.9 m、0.7 m、1.22 m、1.3 m、2.21 m、梁行で2.76 mを計る。柱穴の掘り方は円形で径0.23×0.19 m～0.45×0.4 m、深さ0.09 m～0.39 mを計る。

P4,P5から土器などが出土しており、その中には弥生式土器細片や須恵器細片が認められ、実測できるものは1片のみであった(第22図(25))。また、P4から玉髄質の剥片が認められた。

(25)はP5から出土した底部片で、底部径4.5 cmを計る。平底から外傾しながら立ち上がるもので、外面にはヘラミガキが、内面にはヘラ削りが施されている。この特徴から弥生中期後半頃と思われる。

⑩ SB-05 (第16図)

本建物跡は調査区南東端部で検出された掘立柱建物跡である。桁行梁行共に1間(桁行2.5 m、梁行1.58 m)で、3.95㎡の床面積を持ち、棟方向はN-48° 15′ —Eである。柱穴は計4穴検出した。それらの柱穴の掘り方は全て円形で、径0.25×0.25 m～0.42×0.36 m、深さ0.13 m～0.29 mを計る。

P3以外の柱穴から須恵器片が出土したが、細片でありその詳細は不明である。

⑪ SB-06 (第17図)

本建物跡はSI-02に重複する状態で検出された掘立柱建物跡である。桁行梁行共に2間(桁行4.45 m、梁行4.08 m)で、18.16㎡の床面積を持ち、棟方向はN-19°—Eである。柱穴は計6穴検出した。それらの柱間寸法はP1～P2で2.15 mを、P2～P3で2.3 mを、P6～P7で1.83 mを、P7～P1で2.25 mを、各々計る。柱穴の掘り方は円形～楕円形を呈し、径0.2×0.19 m～0.31×0.21 m、深さ0.14 m～0.24 mを計る。P2,P3では径14～15 cmを計る柱痕が検出された。

P1,P3,P5から土器片などが出土しており、それらは「草田5期」、「高広IVB期」の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広IVB期」と思われる。しかしそれらの殆どは細片であり実測できるものはなかった。

⑫ SB-07 (第18図)

本建物跡はSB-02の西側にSB-02,08と重複する状態で検出された、南北棟の側柱掘立柱建物跡である。桁行3間(5.02 m)、梁行1間(1.72 m)、8.65㎡の床面積を持ち、棟方向はN-36° 30′ —Eである。柱穴は計7穴検出した。それらの柱間寸法は桁行で2.96 m,2.05 m,1.93 m,1.98 m,1.09 mを計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.24×0.23 m～0.59×0.5 m、深さ0.26 m～0.47 mを計る。こ

のうち P1, P3は SB-08と重複している。P6, P7は中程の深さにテラスをつくり二段掘りの状態であり、P7では径約15 cm を計る柱痕が検出された。

P4, P5以外の柱穴から土器などが出土しており、それらは「草田5期」、「高広ⅢB期」、「高広ⅣB期」、「高広Ⅴ期」の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広Ⅴ期」と思われる。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは2片しかなかった(第22図(26)・(27))。また、P3から土器などとともにスラッグと思われる塊が3個と鉄釘片と思われる塊が1個、出土した。

(26)はP3から出土した須恵器の坏片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁端部の形態的特徴から「高広ⅣB期」と思われる。

(27)はP7から出土した須恵器の皿片で、推定口径14.8 cm、器高1.7 cm を計る。口径の割には器高が低く、底部からかなり外傾しながら立ち上がり口縁端部で外反する。底部外面には回転糸切り痕が認められる。また焼成が甘く器面は白灰色をしている。この特徴より「高広Ⅴ期」と思われる。

⑬ SB-08 (第18図)

本建物跡は SB-07と重複している掘立柱建物跡である。桁行梁行共に3間(桁行3.85 m, 梁行3.24 m)で、12.47㎡の床面積を持ち、棟方向は N-78°-E である。柱穴は計8穴検出したが、P2に接して SK-03が確認された。それらの柱間寸法は P1~P2で0.9 m を、P2~P3で1.3 m を、P3~P4で1.66 m を、P4~P5で1.09 m を、P6~P7で1.1 m を、P7~P8で1.02 m を、P8~P1で1.1 m を、各々計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.26×0.25 m~0.58×0.48 m, 深さ0.1 m~0.4 m を計る。このうち P4, P6は SB-07と重複している。P3では径35×20 cm, 深さ6 cm の凹みが確認された。

P1, P2, P3, P4, P6から土器などが出土しており、それらは「高広ⅣA期」の時期を示している。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは1片しかなかった(第22図(28))。また、P1から土器などとともに青メノウが出土した。

(28)はP2から出土した須恵器の底部片で、推定底部径11.5 cm を計る。上げ底気味の底部より内湾しながら立ち上がるもので、底部外面には回転糸切り痕が認められる。底面内部には指による圧痕が認められる。かなり大形の坏で、鉄鉢の可能性も否定できない。「高広ⅣA期」と思われる。

⑭ SK-03 (第18図)

SB-08のP2に隣接して検出された土壌で、西側に隣接して SI-03がある。楕円形を呈し、0.64×0.53 m, 深さ0.34 m を計る。

本土壌から青メノウ・焼土・須恵器・土師器・土製支脚が出土しており、それらは SB-08と同じ「高広ⅣA期」の時期を示している。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは3片しかなかった(第23図(3)~(5))。

(3)はSB-08のP2周辺の地山面から出土した破片と接合したもので、口径11.5 cm, 底部径6.3 cm, 器高4.2 cm を計る須恵器の坏である。平底から内湾しながら立ち上がり口縁部に至るが、口縁部がくびれない。底部外面には回転糸切り痕が認められる。

(4) は推定口径11.2 cm, 推定底部径8.9 cm, 推定器高4.0 cm を計る須恵器の坏で、平底よりやや丸味をもって立ち上がり外傾して伸び口縁部に至る。

(5) は推定口径12.7 cm を計る須恵器の坏で、内湾しながら立ち上がり口縁部に至り、口縁端部は内側に肥厚する。

(3) ~ (5) はそれらの特徴よりともに「高広ⅣA 期」と思われる。

⑮ SB-09 (第19図)

本建物跡は SB-02の東側に位置する南北棟の掘立柱建物跡である。桁行2間 (3.82 m) 以上、梁行1間 (1.8 m) 以上、6.88㎡以上の床面積を持ち、棟方向は N-13°30′—E である。柱穴は計4穴検出したが、東側桁行の柱穴は検出できなかった。それらの柱間寸法は P1~P2で1.8 m を、P2~P3で1.92 m を、P3~P4で1.9 m を、各々計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.17×0.16 m~0.27×0.21 m, 深さ0.08 m~0.13 m を計る。

P4以外の柱穴から土器などが出土したが、殆どが細片でありその詳細は不明である。

⑯ SB-10 (第20図)

本建物跡は、SI-03の北側に隣接して検出された南北棟の掘立柱建物跡である。桁行2間 (4.84 m) 以上、梁行1間 (1.6 m) 以上、7.74㎡以上の床面積を持ち、棟方向は N-15°—E を示す。柱穴は計5穴検出したが、東側桁行の柱穴は検出できなかった。それらの柱間寸法は P1~P2で1.62 m を、P2~P3で1.6 m を、P3~P4で0.82 m を、P4~P5で2.3 m を、各々計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.25×0.24 m~0.50×0.32 m, 深さ0.09 m~0.25 m を計る。P4では径17 cm, 深さ23 cm の凹みが確認された。

P5から土師質土器と思われる破片が出土したが、細片のために図示はできなかった。

⑰ SB-11 (第21図)

本建物跡は、SB-03,04,SA-03と重複する状態で検出された、南北棟の掘立柱建物跡である。桁行3間 (3.46 m)、梁行2間 (3.18 m)、11.78㎡の床面積を持ち、棟方向は N-21° 30′—W を示す。柱穴は計8穴検出したが、東側桁行の中央柱は検出できなかった。それらの柱間寸法は桁行で1.12 m,1.22 m,1.18 m,3.9 m、梁行で1.8 m,1.44 m,1.46 m,1.72 m を計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.21×0.17 m~0.47×0.44 m, 深さ0.09 m~0.48 m を計る。このうち P5は SB-04と重複していた。P7は3個の柱穴が接しており、建て替えられたような様相を呈していた。P5では径17 cm を計る柱痕が検出された。

P6以外の柱穴から土器片などが出土しており、それらは「高広ⅣB 期」の時期を示している。しかしそれらの大半は細片であり実測できたのは1片しかなかった (第23図 (1))。また、P2から玉髓質の剥片が認められた。

(1) は P5から出土した須恵器の坏蓋片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁端部の形態的特徴から「高広ⅣB 期」と思われる。

⑮ SB-12 (第21図)

本建物跡は、SB-03,04,SA-03と重複する状態で検出された、南北棟の掘立柱建物跡である。桁行3間(4.7 m)、梁行1間(2.28 m)、10.72㎡の床面積を持ち、棟方向はN-26° 30′ -Wを示す。柱穴は計8穴検出した。それらの柱間寸法は桁行で1.34 m, 1.95 m, 1.46 m, 1.4 m, 1.92 m, 1.36 mを計る。柱穴の掘り方は円形を呈し、径0.27×0.26 m～0.82×0.46 m、深さ0.16 m～0.25 mを計る。このうちP3はSB-04と、P5はSB-03,04と、P6はSB-03と各々重複していた。P1はSA-03の柱穴と接しており、建て替えられたような様相を呈していた。P3の裏込め土は赤褐色土と黒褐色土が互層状に詰められていた。

全ての柱穴から土器などが出土しており、それらは「草田6期」、「高広IA期」、「高広IVB期」の時期を示している。そして本建物跡の最下限の時期は「高広IVB期」と思われる。しかしそれらは細片であり、実測できたものはなかった。

⑯ SK-02 (第8図)

調査区北側で検出された土壌で、楕円形を呈し、0.91×0.53 m、深さ0.22 mを計る。本土壌から甕形土器片が出土したが(第23図(2))、推定口径15.6 cmをはかる。口縁部は稜からやや外傾しながら立ち上がり端部に至る。稜は下方に若干伸びる。内外面ともに風化が著しく器面調整などの詳細なことは不明だが、複合口縁部の形状からみると「草田2期」と思われる。

(3) その他の出土遺物

この他、ピットを100穴以上検出し、それらのなかで遺物を出土したピットを数十穴確認したが、各ピットから出土した遺物の多くは細片であり実測できたのは僅か8個しかなかった(第23図(6)～(13))。

(6)・(7)はB-7区南端部のP100から出土した。(6)は須恵器の碗の口縁部片だが、細片のために口径は計測できなかった。体部から外傾しながら口縁部に伸び、口縁下部外面に上下二段の稜をつくりその下に波状文を施す。「山本編年I期」⁽¹⁴⁾と思われる。(7)は土師器の甕の口縁部だが、細片のために口径は計測できなかった。風化が著しく器面の調整は不明である。

(8)はB-6区やや北側のP101から出土した須恵器の坏で、口径11.9 cm、器高3.7 cm、底部径7.3 cmを計る。底部から外傾しながら直線的に立ち上がり口縁部に至り、底部外面には回転糸切り痕が認められる。また焼成が甘く器面は白灰色をしている。この特徴より「高広V期」と思われる。

(9)はC-4区やや北側のP102から出土した須恵器の壺で、口径5.2 cm、器高12.3 cm、底部径7.7 cmを計る。平底から内湾しながら立ち上がり口縁部は大きく外反し、底部径と体部径がほぼ同じであり、底部外面には回転糸切り痕が認められる。焼成は良好で器面は濃青灰色を呈する。この壺は徳利形と言われるものでその出土例は少なく、松江市の池の奥2号墳で出土した壺と類似する。このことからこの壺も11世紀と思われる⁽¹⁵⁾。

(10)はC-4区やや北側のP103から出土した弥生土器の甕だが、細片のために口径は計測でき

なかった。口縁部外面にヘラ状工具による擬凹線文を8条描いている。内面はヘラ磨きを施す。この特徴より「草田2期」と思われる。

(11) は B-3区中央の P 104から出土した須恵器の坏蓋で、推定口径12.6 cm を計る。口縁部外面の稜は全くその痕跡を留めずそこで傾きが変化するだけであり、天井部外面にはヘラ切り痕が認められる。この特徴から「高広ⅡA 期」と思われる。

(12) は B-6区中央の P 105から出土した須恵器の皿口縁部片だが、細片のために口径は計測できなかった。口縁端部で外方に僅かに屈曲する。この特徴から「高広ⅣB 期」と思われる。

(13) は B-4区やや北側の P 106の検出面から出土した石製品で、直立した状態で検出したものである。全長24.7 cm, 幅9.1 cm, 厚さ4.1 cm を計る。器面の一部に擦痕が認められるが、その性格など詳細は不明である。

この他、第1次調査の時に各トレンチ内から、また第2次調査の時に既述した各遺構の検出面より上の層から多種多様の遺物が多量に出土したが、その殆どが破片であり実測できたのは僅か9片であった(第23図(14)～第24図(5))。

(14) は B-4区の暗褐色土(旧表土)中より出土した須恵器の皿で、推定口径14.3 cm, 器高2.5 cm, 推定底部径8.9 cm を計る。上底気味の底部から外傾しながら立ち上がり口縁部で僅かに外反し、底部外面には回転糸切り痕が認められる。この特徴から「高広ⅣB 期」と思われる。

(15) は B-6区の暗褐色土(旧表土)中より出土した須恵器の小皿で、口径13.2 cm, 器高2.1 cm, 底部径8.4 cm を計る。(14) とほぼ同じ特徴をもつことから「高広ⅣB 期」と思われる。

(16) は同じ B-6区の表土中より出土した須恵器の坏蓋で、口径9.9 cm, 器高3.9 cm を計る。かなり小形で、天井部外面にはヘラ切り、ヘラ起こし痕が認められる。第23図(11) とほぼ同じ特徴をもつことから、「高広ⅡA 期」と思われる。

(17) は第1次調査時の T-1の旧表土中から出土した砥石で、長さ4.6 cm 以上、幅5.8 cm, 厚2.1 cm を計る。3面に砥面が認められる。砂岩質と思われる。

第24図(1) は同じ T-1の赤褐色土(整地層)から出土した剥片で、4.2 cm×3.2 cm, 最大厚0.8 cm を計る。玉髓製と思われる。

(2) は第1次調査時の T-6の灰褐色土中から出土した石鏃で、全長2.3 cm, 最大幅1.3 cm, 最大厚0.3 cm を計る。安山岩質である。弥生時代の可能性がある。

(3) は第1次調査時の T-6の灰褐色土中から出土した剥片で、2.6 cm×4.1 cm, 最大厚0.7 cm を計る。黒曜石製で、一部に2次加工が認められるが用途・時期など詳細は不明である。

(4) は第1次調査時の T-6の灰褐色土中から出土した剥片で、1.4 cm×3.6 cm, 最大厚0.6 cm を計る。黒曜石製である。

(5) は第2次調査時の B-4区の旧表土中から出土した剥片で、4.1 cm×5.3 cm, 最大厚1.5 cm を計る。流紋岩製である

IV. 小 結

(1) 出土遺物について

本遺跡の調査の結果、多種多様な遺物が出土したが、まず各遺構の時期などを決定づける遺物について簡単に触れておく。

SI-01から出土したが実測できなかった細片、SK-02から出土した甕形土器（第23図（2））は、複合口縁部外面にヘラ状工具による擬凹線文を描き、稜は下方に若干伸びる特徴を持つことから、「草田2期」としても誤りはないと思われる。

SI-02から出土した甕形土器（第22図（3）～（8）、（10）、（11））の口縁部は、あまり突出していないが水平方向に若干突出する稜を持っており、その特徴は「草田5期」に認められるものである。また高坏（第22図（9））は、丸みを帯びた体部から緩やかに外反する形態やヘラミガキ調整の技法の特徴を持っており、その特徴は「草田6期」に認められるものである。つまり、SI-02から出土した遺物は「草田5期」～「草田6期」としても良いと思われる。また、SI-03から出土したが実測できなかった細片の形態的・技法の特徴を見ても、SI-02と同じ「草田5期」～「草田6期」としても誤りではないと思われる。

SB-08の柱穴から出土した須恵器の底部（第22図（28））やSK-03から出土した須恵器の坏（第23図（3）～（5））は、回転糸切り痕を持つ底部から内湾しながら立ち上がり口縁部に至る特徴を持つが、この特徴は「高広ⅣA期」に認められるものである。

SB-01の柱穴から出土した須恵器の坏蓋（第22図（13））は、口縁端部の形態的特徴から「高広ⅣB期」の範疇に入るものと思われる。また、SB-02の柱穴から出土した須恵器の坏蓋や坏（第22図（20）～（22））、SK-01から出土した須恵器の坏（第22図（23））、SB-11の柱穴から出土した須恵器の坏蓋（第23図（1））、SB-04やSB-06、SB-12から出土したが実測できなかった細片などは、屈曲のみの坏蓋口縁端部や底端部から直線的に伸びる坏の形態的特徴から同じ「高広ⅣB期」と思われる。

SB-07の柱穴から出土した須恵器の皿（第22図（27））は、回転糸切り痕を有する底部からかなり外傾しながら立ち上がり口縁端部で外反する形態的特徴を持ち、焼成が甘く器面は白灰色を呈する。この特徴は「高広Ⅴ期」に認められるものである。

竪穴式住居跡や掘立柱建物跡に伴う遺物についてその概略をまとめたが、それ以外では古くは縄文土器が出土した。しかしその細片が包含層から出土するという出土状況であり、その詳細は言及できない。その後では、弥生中期と思われる土器片が数片出土しているが、実測できたのは第22図（25）のみである。この後は既述したように、弥生後期及び終末期の土器が多く出土しておりそれらの多くは各遺構に伴うものである。古墳時代に入ってから、須恵器ではP100から「山本編年Ⅰ期」の特徴を持っている椀（第23図（6））が出土した後、「高広ⅠA期」から「高広Ⅴ期」の特徴を持つ土器が各遺構や包含層から出土した。しかしその出土量を見ると、「高広ⅠA期」から「高広Ⅲ期」の時期のそれは多いが特に「高広Ⅳ期」の時期のそれが最も多く、次の「高広Ⅴ期」の時期になると

極端に少なくなり僅か数片しか出土しなかった。

「高広V期」の坏の特徴は松江市の長峯遺跡の SK-01⁽¹⁶⁾や神田遺跡の SK-01⁽¹⁷⁾出土の坏のそれと良く類似しており、「高広V期」はこれらの年代とほぼ同時期と比定しても差し支えなく、「9世紀後半～10世紀前半」としても過言ではないであろう⁽¹⁸⁾。

この後は、11世紀代と思われる第23図(9)の徳利形の壺があるが、この徳利形壺は柱穴の検出面から倒立した状態で出土しており、その出土状況は11世紀代の建物跡が存在したと判断しても差し支えないと考える。しかし建物跡を検討してもその柱穴に関係する建物跡は想定することはできなかった。

(2) 検出遺構について

調査の結果、竪穴式住居跡が3棟、掘立柱建物跡が12棟、柱穴列が3条、土壌状遺構が3基、検出されたが、ここでは竪穴式住居跡と掘立柱建物跡について若干詳しく見てみたい。

まず竪穴式住居跡の平面形をみると、SI-01は円形で、SI-02と SI-03は隅丸方形である。鳥取県の青木遺跡の研究成果を本遺跡の竪穴式住居跡に照らしてみると⁽¹⁹⁾、SI-01はⅠ期～Ⅲ期(弥生中期後葉～弥生後期)、SI-02と SI-03はⅢ期～Ⅳ期(弥生後期～土師Ⅰ式古期)となる。これは各竪穴式住居跡の出土遺物の時期と対応しており、青木遺跡での竪穴式住居跡の平面形の変遷を確認するものと言える。

一方 SI-03は、青メノウの剥片の出土状況と出土点数をみると、明らかに玉作工房跡と判断できるが、工房跡で通常見られる未成品や完成品、砥石などは1点も出土しなかった。SI-03の時期は平面形や出土遺物から「草田5期～6期(弥生後期終末)」と思われるが、管見では、この時期の玉作り工房跡は松江市の平所遺跡⁽²⁰⁾しか調査例がなく、大変珍しい。しかし、平所遺跡では水晶質材を主とする玉材としているのに対して SI-03は青メノウのみを玉材としており、内容的には明らかに異なる。また平所遺跡は大橋川の南側に位置するが本遺跡は北側に位置している。このように大橋川北側での当該時期の玉作工房跡の調査例は今回が初例であり、ここでは調査した内容を提示して今後の調査資料の増加及び研究に委ねたい。ただ本遺跡内の工房跡はこの SI-03だけであり、一般集落の中に玉作工房跡が1棟存在するとしたほうが妥当と思われる。

次に掘立柱建物跡について、規模・柱間寸法・柱穴の掘り方の規模や形状・棟方位などを指標としながら少し詳しく見たいが⁽²¹⁾、SB-09,10については既述のように、その間数や規模が不明であるためここでは取り扱わない。

まず12棟の建物跡はすべて側柱造りの建物跡で、南北棟は7棟(SB-01,02,03,04,07,11,12)で、桁行・梁行が3間×2間を示すものは5棟《SB-01(5.45 m×3.93 m), 02(6.28 m×3.72~4.02 m), 03(5.42 m×3.82 m), 04(7.34 m×4.25 m), 11(3.46 m×3.18 m)》で、3間×1間を示すものは2棟《SB-07(5.02 m×1.72 m), 12(4.7 m×2.28 m,2.04 m)》であった。正方形プランの建物跡は3棟で、桁行・梁行の間数の1間のもものが SB-05(2.5 m×1.58 m)で、2間のもものが SB-06(4.45 m×4.08 m)で、3間のもものが SB-08(3.85 m×3.24 m)で、各1棟ずつであった。つまり、本遺跡では3間×2間の南北棟が主流であることを物語っているが、これは桁行3間を計る建物が古代集落において標準的

な規模であり、約50%の割合を占めるという全国的な傾向⁽²²⁾と照らし合わせても頷けるものと言えよう。また注目すべきことは、SB-01と03の規模がほぼ同じであるが、SB-04は他の掘立柱建物跡より一回り程規模が大きく、またSB-11は規模が異様に小さいということである。次に身舎の床面積を見ると、0～9㎡の床面積を有する建物跡は2棟《SB-05 (3.95㎡), 07 (8.65㎡)》で、10～19㎡の床面積を有する建物跡は4棟《SB-06 (18.16㎡), 08 (12.47㎡), 11 (11.78㎡), 12 (10.72㎡)》で、20～29㎡の床面積を有する建物跡は3棟《SB-01 (21.42㎡), 02 (24.87㎡), 03 (20.7㎡)》で、30㎡以上の床面積を有する建物跡は1棟《SB-04 (31.2㎡)》であり、20㎡以下の床面積を有する建物が主流と言える。

各建物跡の柱間寸法を見てみよう。3間×2間の建物跡では、SB-01が桁行1.82 m、梁行1.84 m、2.09 mを計り、桁行は同じ長さになっている。SB-01と規模がほぼ同じSB-03は、梁行は1.91 mで統一されているが、桁行は1.58 m～1.94 mを計る。また他の3間×2間の建物跡より一回り大きいSB-04は柱間寸法も長く、桁行、梁行ともに2 mを越えている。この他SB-11は梁行の寸法より桁行の寸法が短く、桁行で1.12 m～1.22 mを計る。またSB-08は桁行、梁行共に柱間寸法が他の建物跡より短い。一方、各柱穴を見ると、ほとんどが円形か楕円形を呈しているが、大きいものと小さいものとに分類できる。径50 cm、深さ50 cmの規模を越える柱穴はSB-01,02に多く、SB-05,06の全柱穴はそれよりも小規模で、それを越える規模と越えない規模の柱穴を持つものはSB-03,04,07,08,11,12に認められた。つまり、床面積が20㎡以下の建物跡の柱穴はその規模が小さい傾向があり、20㎡以上のそれは大きい傾向がある。

さて、各建物跡の棟方位を見てみる。N-4°～10°-Eの方位を示す建物跡は、SB-01 (N-6° 10′ -E)、02 (N-8° 40′ -E)の2棟である。N-11°～20°-Eの方位を示す建物跡は、SB-03 (N-16° 40′ -E)、SB-06 (N-19° -E)、SB-04 (N-19° 10′ -E)の3棟である。N-30°～50°-Eの方位を示す建物跡は、SB-07 (N-36° 30′ -E)、SB-05 (N-48° 15′ -E)の2棟である。これ以外ではSB-12がN-63° 30′ -Eの方位を、SB-11がN-68° 30′ -Eの方位を、SB-08がN-78° -Eの方位を各々示している。本遺跡の地形は東側に緩やかに傾斜しており、各建物跡はその棟方位において幾分かの制約を受けていると考えられるが、その中でもSB-01、02を中心としてSB-03,06,04の5棟は、N-6°～19° 10′ -Eという非常に近い棟方位を示すのは何らかの意味をもっていると考えられる。またそれらとは棟方位が異なるがSB-12と11もN-63° 30′～68° 30′ -Eのように棟方位が近い。逆にSB-07、05、08の3棟の棟方位には明らかに統一性が認められない。

以上、さまざまな観点から長々と分類を試みて来たが、最後に遺物と建物跡とをもう一度まとめてみたい。出土遺物から言及できたことは、建物跡の中でSB-08が「高広ⅣA期」に該当し、SB-01,02,04,06,11,12が「高広ⅣB期」に該当し、SB-07が「高広Ⅴ期」に該当するが、その他のSB-03,05,09,10は時期が不明である。また、SB-01,02,03はその規模・床面積・柱間寸法・柱穴・棟方位等で極似することから、同時期の建物跡としても過言ではない。この中で特にSB-01は、東側に1面庇及び東西に柵と思われる柱穴列を持っていることからこの集落の中心的建物跡と思われるし、SB-04は既述の3棟と比べると規模が一回り大きいし西側と北側に柵と思われる柱穴列を同様に持っている。これらのことからSB-04も中心的な建物跡と思われるが、SB-03,11,12と重複することから、

明らかに3棟とは異なる時期に建てられたはずである。しかし出土遺物からも柱穴の調査からもその前後関係は追えず、ここでは既述の3棟とは時期が異なるけれどもこの集落の中心的建物跡という程度に留めておきたい。

つまり、「高広ⅣA期」には1棟(SB-08)＋数棟が存在し、次の「高広ⅣB期」には7棟(SB-01,02,03,04,06,11,12)±数棟が存在し、次の「高広Ⅴ期」には1棟(SB-07)＋数棟が存在したことが言える。但し、その中でSB-11と12は棟方位がほぼ同じであり、また2棟の建物跡が並立するような状況で検出したことから、この2棟はSB-03,04とは異なる時期の建物の可能性ある。

(註)

- (12) 島根県鹿島町教育委員会『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書 5 南講武草田遺跡』1992
- (13) 島根県教育委員会『高広遺跡発掘調査報告書 ―和田団地造成工事に伴う発掘調査―』1984
- (14) 山本清「山陰の須恵器」(『島根大学開学十周年記念論文集』 1960)
- (15) 広江耕史「島根県における中世土器について」(『松江考古』第8号 1992)
- (16) 松江市教育委員会『中竹矢後1号墳・長峯遺跡』 1987
- (17) 島根県教育委員会・中国電力株式会社島根支店「神田遺跡」(『北松江幹線・松江連絡線新設工事予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』 1987)
- (18) 「高広Ⅴ期」の年代については、註(13)では9世紀中頃から後半代にあてており、また註(16)では平安時代としており、註(17)では9世紀末だが10世紀中頃までは降らないとしており、註(15)では10世紀前半としており、各調査担当者及び研究者の間で若干の年代のずれが認められる。よってここではその年代の幅を認め、年代のずれの修正については今後の研究に委ねたいと考える。
- (19) 竪穴式住居跡の平面形プランについて言及している鳥取県の青木遺跡をみると、Ⅰ・Ⅱ期(弥生中期後葉・弥生後期)の大半は円形プランが主流で、Ⅲ期(弥生後期)は円形プランが継続するとともに隅丸方形・多角形プランが新たに出現し、Ⅳ期(土師Ⅰ式古期)になると隅丸方形・多角形プランは継続するが円形プランは減少し、Ⅴ・Ⅵ期(土師Ⅰ式古期)に入ると方形・長方形プランが新たに出現するが円形・隅丸方形・隅丸多角形が消滅し、Ⅲ期・Ⅳ期がバラエティーに富み、これまでの円形プランから多様なプランへ、更にⅤ期・Ⅵ期の方角化に向かう過渡期的様相をみてとれる、としている。青木遺跡発掘調査団『鳥取県米子市青木遺跡発掘調査報告書 Ⅲ -A・B・E・H地区-』 1978
- (20) 平所遺跡の報告書のなかで、SI-03と同じ青メノウを主玉材とする工房跡として玉湯町の史跡出雲玉作跡の71CⅡ号址を挙げているが、この工房跡の時期はSI-03よりも降る「小谷式」の時期とされている。島根県教育委員会『国道9号線バイパス建設予定地内埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅰ,Ⅱ 1976、1977
- (21) 山中敏史「古代郡衙遺跡の再検討」(『日本史研究』161号 1976)
- (22) 宮本長二郎「歴史時代の住居」(『日本原始古代の住居建築』 1996)



版



SB 02全景（北より見る）



SB 03全景（南より見る）



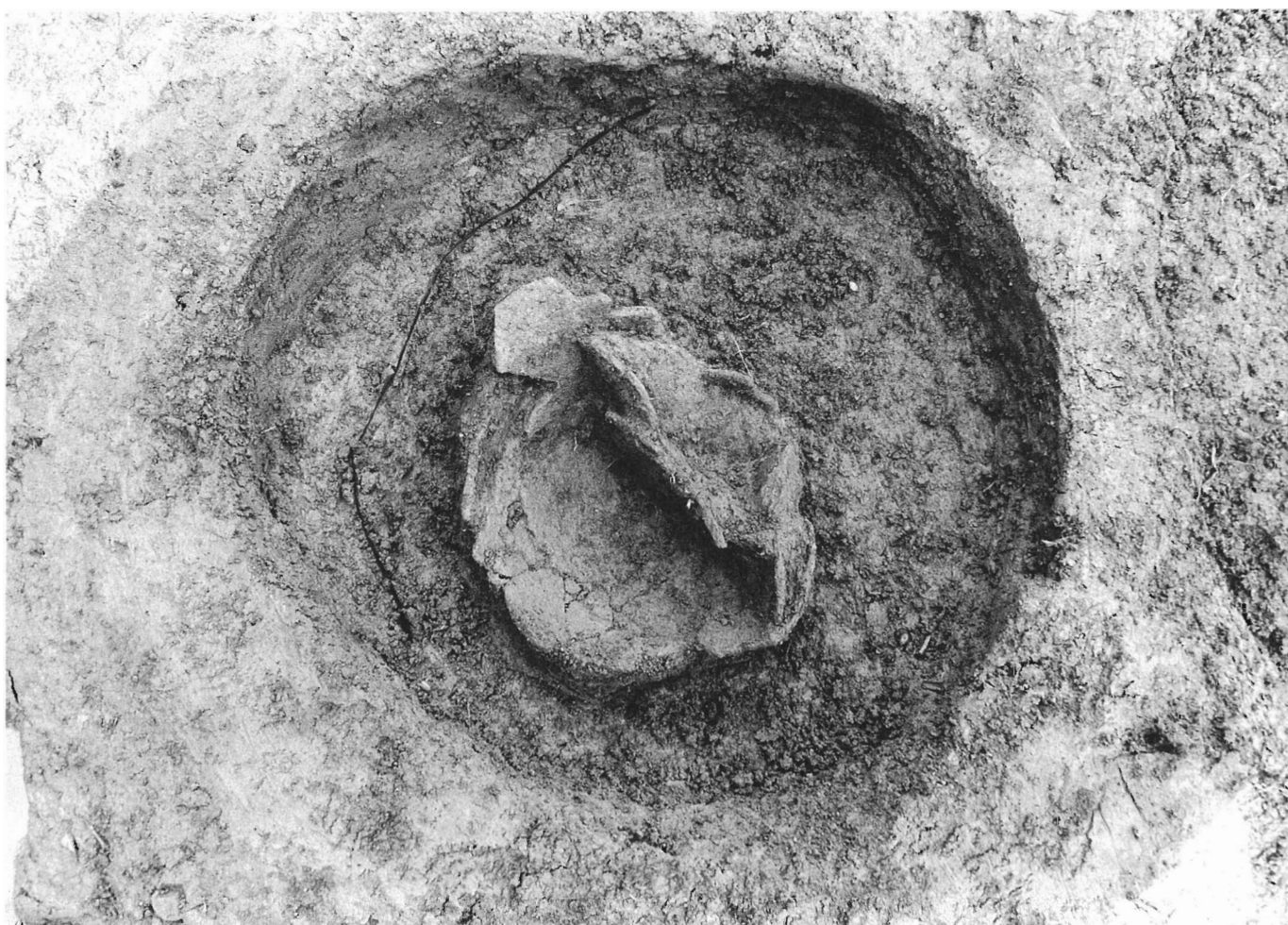
SI01全景（西より見る）



SI02全景（東より見る）

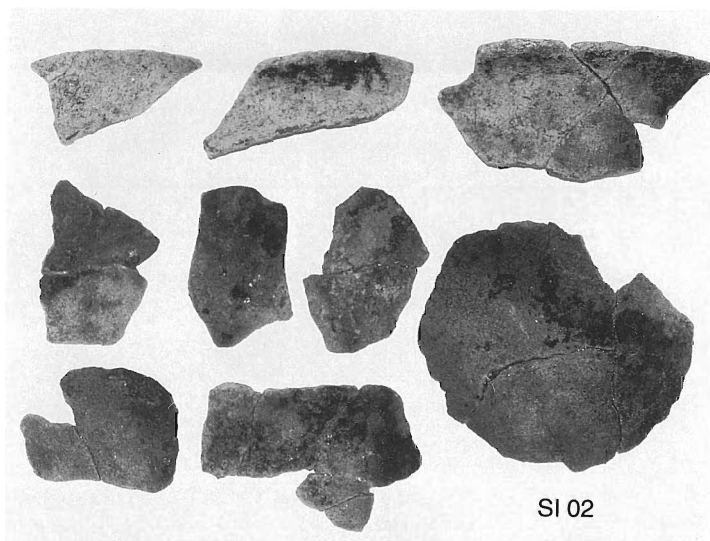
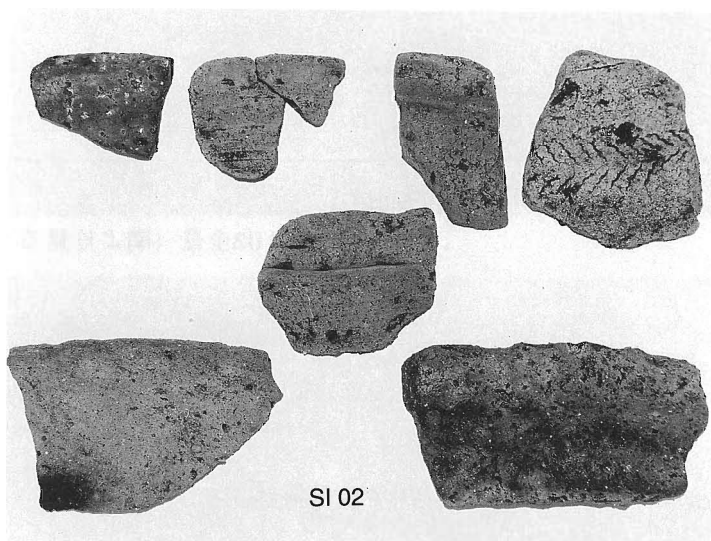
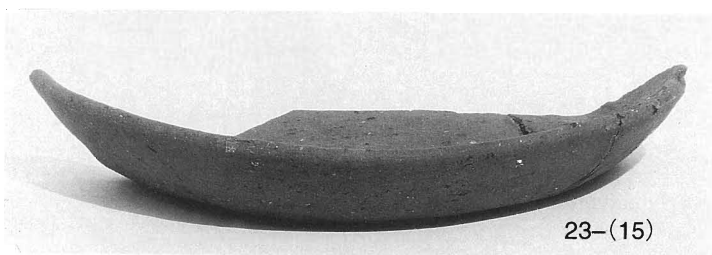
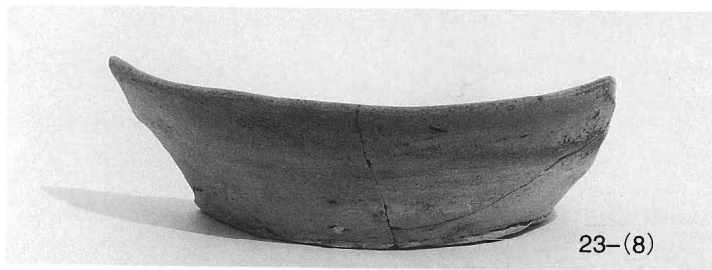


SI03全景（南より見る）



遺物出土状況（P）

图版 4



柴Ⅲ遺跡発掘調査報告書

1997(平成9年)3月発行

発行 松江市教育委員会
財団法人松江市教育文化振興事業団

印刷 高浜印刷所
〒690 島根県松江市北堀町8
(Tel 0852-24-3000)

